
ロリコン・コンプレックス！

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコン・コンプレックス！

【Nコード】

N6010Z

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

小学生みたいな身長体型がコンプレックスの女子高校生、佐々木ゆみ。そんな彼女には好きな人がいる。

けれども、その恋の道は険しかった。何せ片恋の相手は学校中で噂になるほどの人物なのだ。憧れの彼が有名なのも当然。だって学校一のイケ面で、定期テストの上位常連、その癖スポーツ万能、そして……真正のロリコン、だからだ。

『わたしの好きな人は、ロリコンです』　これはそんな一行目から始まって、迫りくる障害なんて跳ね飛ばし、立ちふさがる常

識の壁を突き破る、恋に生き愛へとひた進む女の子の、ピュア・ラ
ブストーリー。

その1 らぶらぶ

わたしの好きな人は、ロリコンです。

ある日、わたしは言いました。

「先輩、わたしの胸はぺったんこです」

わたしは胸に手を当て、ずっと先輩の目の前に立ちふさがりました。

わたしのいまいる場所は先輩の部屋です。椅子に座って何やら本を読んでいた先輩は、目の前に屹立するわたしに一瞬だけ視線を上げ、そしてすぐに戻しました。

「そうだね。ぺったんこだね。ちなみに君は、ぺったんこの語源は知っているかな」

「無論です」

落ち着きをはらって言葉を返す先輩は、わたしの逆セクハラ発言に対してちっともあわてていません。あっさりと肯定してみせたどころか、さりげなく話題を変えようとしています。

わたしからのセクハラに慣れたのでしょうか。ちなみにぺったんこの語源は諸説ありますが、もちつきの際にぺったんぺったんと言が鳴ることからという話を聞いたことがあります。真偽は知りません。

先輩の冷たい態度にも、わたしは揺るがずめげずに続けました。

「背だってちっちゃいですし顔だってくりくりの童顔です。制服を着ていても中学生、私服で男子の友達と繁華街を歩いていたときは小学生と間違えられて、一緒にいたその男友達が条例違反の容疑で補導されたこともあります」

「それはその人も災難だったね……というか、自分で言っていて悲しくならないかな」

「そうですね。昔は確かに鏡を見るたびに落ち込みましたし着る服が限られて泣きたくなりました。中学一年生の折に勇気を出して梓ちゃんと初めてブラを買いに行った時、一緒に行った彼女がAだのBだの店員さんと相談しているのに、わたしといえばサイズを計った時にまるでちょっと背伸びをした小学四年生をみるかのような微妙な笑顔で『お客様……まだご必要ではないのでは?』といわれて、それでもスポーツブラとか子供用のじゃないちゃんとしたブラが欲

しかったので喰い下がってその結果『申し訳ありません。当店にはAAやAAAの在庫はございません』と謝られたというトラウマはいまでも忘れられません、それでもいまは悲しくなんてありません！ 生まれ変わったんです！ むしろ先輩のニーズにこたえられることを喜ばしく思ってます！ ほら先輩！ ちっちゃくまな板で小学生ばりの童顔！ ムラムラしませんかっ？」

わたしは顔を喜色に染めてずいと顔を近づけます。その距離、五センチ。高鳴る心音は伝えられなくても、わたしのあらぶる吐息が先輩に伝わる距離です。

先輩は非常に嫌そうな表情で顔をそむけました。

「しないよ。君は僕の好みではないからね」

淡々とした答え。わたしはそれに、むむむと眉を寄せました。

こんなにかわいい女の子が迫っているというのに、なんて気のない反応でしょうか。それとも先輩の読んでいる本は、鼻先に迫っている女の子よりも心ひかれるものなのでしょうか。

二次元ですらない文字の集合体ごときに敗北するなど、わたしの女としてのプライドが許せません。ちらりと本の表紙に目をやります。

先輩の読んでいる本のタイトルは『幼女甲冑の薦め』というものでした。

「……………」

……………幼女甲冑って、なんでしょうか？ なにやらものすごくハイレベルな匂いがありますけど……。お客様の中にご存知の方、いらっしやいますか？ いらっしやいましたら、ご起立お願いします。その後、条例違反で警察に自首してくださいませー、とか一瞬

そのカオスさにキャビンアテンダントごつこをしかけましたが、踏みとどまります。くじけません。わたしの恋はこんなことで折れるわけにはいかないのです！

こうなれば、実力行使しかありません。

わたしは先ほど意図して近付いた先輩の顔を見ました。理知的で整った顔。ニキビのひとつもないすべすべの頬。凛々しくも涼やかなその表情。そしてメガネ！ クールな美男子がそこにいます。

よし、と決めました。

キスをしてしまおう。

本にできなくてわたしにできることは多々ありますが、その筆頭たるものが肉体的接触コミュニケーションであることは疑いの余地ありません。まして、いまこは先輩の家で先輩の部屋の中です。そして先輩の部屋にいるのは、わたしと先輩だけです。ようするに、密室で男女がふたりきりなのです。

これはやってしまっても問題ないでしょう。

いえ、むしろやってしまえという天啓ではないのでしょうか。そう、AをきっかけにBに移行しCまでゴーという神のお告げに違いありません！

先輩の隙について……いまだ！

「何やってんのよ、ゆみ！」

と思ったその時、ばんつと音を立てて扉が開きました。

「あれ、梓ちゃん」

「やっと来たか梓」

わたしと先輩の声がぴったり重なりました。

バッドタイミングでわたしの名前を呼んで部屋に飛び込んできたのは、中学生からの友達であり先輩の妹である梓ちゃんです。

実はもともと今日は彼女の部屋にお呼ばれしていたのです。わたしが先輩の部屋にいるのは残念ながら両者の同意のもとではなく、梓ちゃんがお手洗いに行っている間に彼女の部屋を抜け出し、勝手に先輩の部屋に入りこんだからにすぎません。

梓ちゃんはわたしの正反対にあるといってもよい見事なプロモーションをしている、大人びた美人さんです。冬休みを終えれば高校二年になる彼女ですが、それを知らない人が見れば実際年齢より二つ三つ上の女子大生に見えるでしょう。

梓ちゃんは背筋をぴんと伸ばして声を張り上げました。

「早くその変態から離れなさいっ。襲われるわよ！」

「そんなっ、梓ちゃん！ わたしと先輩を引き離さないでください！」

「おいおい梓。仮にも友達を変態だなんてひどいんじゃないかい？」

その言葉に、梓ちゃんの眉がぴくりと反応しました。

「……はあ？」

憎しみを舌にのせ、なに言っただのこいつ、といわんばかりに顔をしかめます。梓ちゃんの動きに合わせて、腰まで伸びた黒髪がさらにと流れました。

「あのねえ……」

そうして梓ちゃんがゆっくり視線を合わせたのは、先輩の方でした。

「アホなの、兄貴？」

梓ちゃんの視線たるや、真冬のツンドラ平原のように冷やかでした。目元がちょっときつめだということもあって、蔑視という言葉を見事に体现する様がとっても似合っています。

「いまのは兄貴に言ったのよ、この変態クソロリコンがつ。ほら、離れなさい、ゆみ。あんた幼児体型だから兄貴の趣味にヒットしかねないのよ。危ないわよ。こっちおいで」

「うにゃんっ」

顔近づけすぎ、と言いながら梓ちゃんがわたしの襟を掴んでひっぱりました。梓ちゃんは「月曜にはあのクソロリコン兄貴を包装用の新聞紙で梱包して焼却処分してやりたい」と暴言を吐くほどの先輩嫌いなのです。

「梓ちゃん、離してください！」

「だからダメ。そいつが五歳以上十三歳未満にしか興味がないロリコンの変態クズ野郎でもダメ。あんまり無防備すぎるのはよくないわ。そのうち襲われるわよ」

「先輩ならいいですっ。望むところです！ わたしは先輩に襲わりたいんです！ いえ！ むしろ！ わたしが先輩を襲ってるんです！」

「落ちつけちびっこ！」

じたばたと抵抗するわたしの頭に、びすっと梓ちゃんのチョップが振り下ろされました。

その1 らぶらぶ(後書き)

この物語は、大体を書き終えてからの連載となっております。一話を場面ごとに投稿する形になるので、分量は一話につき千文字から五千文字ほどに。平均で二日に一回のペースで投稿していく予定です。

一話目、くすりとでも笑いを誘えましたでしょうか。不安に思いつつも、主人公のゆみに付き合っていただけ懐の広い方がいらっしやることを切に祈りまして。

その2 がやがや（前書き）

前話から時系列がちょっと飛びます。

その2 がやがや

春うらら。

小学生の高学年になる辺りから身体的な成長が止まり、中学生よりちっちゃいっちゃい言われ続けたわたしもいよいよ高校二年生になりました。相変わらずちっちゃい言われているのは変わりませんが、二年生です。一年生の時ほどの新鮮さと始まりの予感はありませんが、それでもちよつと胸がドキドキします。

時計を見ると、八時になる少し前です。ぼつぼつ人も集まってきました。新しいクラスメイトは、全然知らない人もいれば何となく見覚えのある人もいます。運が悪いのでしょうか、親しい友人はいまのところゼロ。さびしいことです。

わたしは何の気なしに校庭を眺めました。桜の花は大部分が散ってしまい、そろそろ葉桜に移ろうかとしています。

そんな春ですが、残念ながら、わたしの恋の桜はまだ咲いていません。

先輩に恋して以来のアタックに次ぐアタック。猛アタックに猛アタック。わたし史上でここまで積極的になったことはないというぐらいの突進アタックを続けたといえますのに、先輩は毛の先ほども私に興味を示してくれませんでした。

理由ははっきりとわかっています。

先輩がロリコンだからです。ロリータ・コンプレックスだからです。合法などには見向きもせず、同年代などもってのほか、五歳以上十三歳未満にしか反応しない、真なるロリコンだからです。

……そういえば、コンプレックスって劣等感という意味ですよ……。しかしコンプレックスと言われて思い浮かぶ単語は、シスコン、ブラコン、ロリコンなどなど犯罪臭しかしないものばかりです。なぜ昨今では変態の代名詞みたいな言葉として普及しているのです。

ようか。

「おはよ、ゆみ」

思い悩んでいますと、声をかけられました。梓ちゃんです。振り返ればそこには、あいかわらず高校生とも思えない大人びた美人さんがいました。

「おはようございます、梓ちゃん」

わたしもぴよこんと頭を下げます。喜ばしいことに、今年も梓ちゃんと同じクラスなのです。

「今日はいいい天気ね。兄貴みたいな変態は、この日の光を浴びたら消え去ってしまいそうなくらいいい陽気」

「先輩はゾンビか吸血鬼ですか……？」

今日の天気さにさりげなく自分の願望を混ぜる梓ちゃんに答えて、ふと思いつきました。そうです。わからないことがあったら、梓ちゃんに聞けばよいのです。

「梓ちゃん。コンプレックスってどういう意味か知っていますか？」

「コンプレックス？　またややこしいこと聞いてきたわね……直訳すると『複合』とか『複雑』よ」

ややこしいと言いつつも、さして考えずにあっさり答えてくれました。梓ちゃん、頭も非常に良いのです。梓ちゃんは決して認めませんが、博覧強記の先輩の影響でしょう。

「複雑……？　はじめて聞きましたけど」

「まあ、そっちはあんまりなじまないわよね。日本語的な用法で『劣等感』って使われているのは、微妙に誤用なのよ。まあ、厳密には誤用とも言いづらいけど……。ちなみにコンプレックスはフェティシズム——俗にいうフェチとほぼ同義に使われることもあるから、ファザコンとかシスコンとかいう使われ方もするの」

わかりやすくするためにだいぶ省略したから詳しくは自分で調べて、と言って話を切り上げました。

うん、勉強になりました。あまり簡単に人に聞きだすクセをつけるものではないでしょう。知りたいことを自分で調べるということは、自己を独立させる第一歩でもあります。

そうして梓ちゃんとおしゃべりをしていますと

「やつほう、藤堂梓と佐々木ゆみ！ 今年も同じクラスか！ 嬉しいよ！」

「なんだなんだー。まだホームルームもやってないのに授業してるのかー」

声をかけてきたのは去年も同じクラスだった二人です。成績はもといその行動がおバカで有名なコンビ

です。最初に声をかけてきた元気のいいショートカットの方が黒衣莉由、間延びした口調のふわふわ髪のほうが白木岸祢。通称、白黒コンビで先生からも二人セットで目をつけられています。

「おはようございます、おふたりとも」

このふたりも一緒のクラスなんですね。残念です。

梓ちゃんもわたしと同意見なようで、ふたりを見るや目を剣呑に尖らせました。

「何よ、あんたら同じクラスじゃないでしょう。ていうか階が違うわよ。二階じゃなくて、一階でしょ」

ちなみにうちの学校は、一階が一年生、二階が二年生、三階が三年生という具合に教室が区切られています。

「ちょっと待て！ 留年なんてしてないぞ。あっちだけならともかく、あたしは違う！」

「おいー。うちはばかじゃないぞー。あっちだけなら、まず間違はなくそうだけどなー」

邪険にあしらう梓ちゃんに、おバカのふたりは互いを指差しました。

ふむ、つまりは

「なるほど。要するに二人とも留年なんですネ。どうぞ仲良く一階へゴーしてください」

「なに！」

「むー」

親指を下に向けてみせると、ばかり、と二人の視線がカチ合います。

「お前が馬鹿なせいで！」

「アホがいるからだろー」

そのまま見ていますと、どっちが真のバカかの論争が始まりました。おバカのふたりはあいかわらず仲が良いようです。

梓ちゃんがため息をつきました。

「新学年になったっていうのにやかましいわね、バカどもは」

「でも梓ちゃんは物知りで教え方も幅広いので、よい教師になれると思いますよ。ほら。古典の山川先生とかよりはずっと」

あの白黒コンビが進級できたのは、間違いなくテスト前に開いていた梓ちゃんの勉強会のおかげです。

「ゆみも膨らませない」

「あう」

こつんとこづかれました。意外とわっしょい攻撃に弱い梓ちゃんは照れているらしく、ちよっと頬を紅潮させていました。

「それより放課後の同好会、行く？」

「無論です」

わたしは力強く頷きました。

同好会というのは、わたしと梓ちゃんと先輩の三人で形成されているものです。ということは、先輩と確実に出会えるチャンスです。先輩と同じ部屋にいられるのです。先輩と同じ空気が吸えるのです。

「地球が割れても行きますとも！」

それで行かないわけがありません。わたしは先輩を愛しているのです。

「あっそ」

鼻息を荒くするわたしの頭に、梓ちゃんはぽんと頭に手を置きました。

「ま、とりあえずホームルームと始業式が先ね」

やれやれとため息をついて、梓ちゃんが自分の席に向かいます。おバカの二人の論争の決着を待たず、キンコーンカーンコーンとチャイムが鳴り、同時に先生が入ってきました。

「おーい、その白黒二人は新学期初日から何やってるんだ。始業式前から早々に生徒指導室に行きたいのかお前らは」

去年の生徒指導を担当していた体育教師が、今年は担任のようです。そのお言葉に、ふたりはびくりと身を震わせて大人しくなりました。

今日は平和な日になりそうです。

その3 めらめら

わたしと梓ちゃんはどここの廊下を歩いていました。

「終わりましたね」

「終わったわねー」

梓ちゃんがぐぐつと背伸びをしました。

今日は始業式とホームルームだけなので、早く終わっています。クラスは梓ちゃんとおバカのふたりを筆頭に、女子の知り合いが結構いたのですね。ちなみに始業式を妨害したおバカの二人は生活指導室行きです。

男子は見知ったのが何人か、それにひとりだけ去年仲良かったのがいましたが……うん、あれは見なかったことにしましょう。

「バカふたりはあいかわらずバカだったわね」

「変わらないので、安心できますけどね。あのふたりを見てるとなごみますよ」

「そう？　しかし学校側もよくあの二人を同じクラスにしたわよね。始業式そうそうやらかしてるしさあ」

「問題児をまとめて見はりやすくしたんじゃないですか？　生徒指導の中村が担任になったのって、どう考えてもあのふたりのせいですし」

「いや、それでも普通別々に分けるって」

おバカのふたりをネタにほのぼのと会話を交わします。

いまはまだ昼前。時計をみると十一時を少しまわったところでした。

始業式はぴかぴかの一年生を見た以外、校長の話も退屈で特に印象もなく終わりました。

「この後は同好会ね」

「そうですね」

地域福祉同好会。

それがわたしと梓ちゃんが所属しており、また去年先輩が入学早々に立ち上げた同好会の名前です。

その活動内容は、地元のボランティアに参加しまくるという同好会です。遊びたい盛りの高校生ではいつさの魅力を感じられないこと間違いなしの、存在理由を疑ってしまうような活動内容でしょう。

同好会の強いて得になる点を上げるならば、内申が良くなるくらいでしょうか。奉仕活動が好きで好きでたまらないという変わった嗜好の持ち主でもない限りは、活動に惹かれて入りたいとは思いうなとこではありません。まあ、わたしからすれば、先輩がいるというその一点で全ての悪条件は払拭されます。

ちなみに去年の冬までには同好会員は先輩と梓ちゃんの藤堂兄妹ふたりでした。一年の冬休み明けにわたしが加入し、現在では三名になっています。

規模的に見れば非常にちっぽけな団体です。あくまで同好会であり部活ですらないのになぜ部屋が与えられたかといえば、非常に学校に都合がよいからでしょう。去年の半年ほどを真面目に活動してから、部室が与えられたらしいです。

わたしたち地域福祉同好会は確かに学校の評判にプラスになる要素しかない同好会です。その上、わたし達は非常に真面目に活動しています。傍から見れば健全この上ない同好会でしょう。

ただ、先生方は気がついていないのでしょうか。

先輩が獲ってくる仕事は、主にか全て児童福祉のボランテ

イアだということに。

「今日は同好会は会議の日でしたっけ」

同好会の活動は基本、ふたつに分かれています。ひとつはボランティア活動そのもの。そしてもうひとつは、数あるボランティア活動の中で何をするか選別して決めるための会議です。

「そうよ」

梓ちゃんは目をぎらぎらと怒らせて頷きました。

あいかわらずヤル気が満ち満ちています。もはや殺気と間違えかねないほどの気を放出しているのは、梓ちゃんが同好会に入ったエピソードに起因するものです。

「相変わらずヤル気に満ちてるといなか殺る気に満ちているといふべきか……まあ、梓ちゃんの目的はそっちですからね」

去年入学したばかりの時分です。児童福祉ばかりやっているという同好会の内容を知った梓ちゃんが怒り狂い「あの兄貴が犯罪行為に走らないように見張ってくれるわ!」と叫び入部したという逸話があるのです。おバカのふたりに聞いたことですが、多分事実でしょう。

よって会議の日、同好会の討論は非常に白熱します。

「絶対、変態兄貴には負けないわよ……! あのロリコンに児童福祉になんて、やらしてたまるもんですか!」

梓ちゃんが、ぐぐつと拳を固めました。気の入れようが半端ではありません。今日も藤堂兄妹の論争が繰り広げられることでしょう。

ふたりの論争は見ているだけで面白いものがありますから、構わないのですが。

過剰なまでに気合を入れる梓ちゃんの肩に、ぽんと手を置きました。

「まあ、でもお昼を食べましょうよ。まだ時間がありますし、学食でおしゃべりして時間を潰しましょう」

同好会活動は、一時からです。

「そうね。あのロリコンを叩きつぶすために、しっかり食べないとね」

梓ちゃんが、不敵ながらも怪しい笑顔を浮かべていました。

その4 きらきら

先輩は、ロリコンです。

わたしは先輩のことが大好きですが、先輩はそれと同じくらい幼女を愛しています。先輩がロリコンなのではなく、ロリコンという存在の全般が先輩なのではと思ってしまっただけ。その愛は無限大であり、彼方に広がる大宇宙と先輩のロリコンさ、そのどちらが広大かと問われたら、わたしは答えることができないでしょう。

では先輩がどれほど幼女を好きか、ついでにわたしにどれくらい先輩のことが好きかを端的に表せるエピソードがあります。少し昔、というか始業式の数日前のことです。

ある日、先輩はこう言いました。

「ペットボトルには二種類ある。ただのペットボトルと輝くペットボトルだ」

「輝くペットボトル？」

それは休日のことです。いつものように道行く幼女を眺めて愛するために外出した先輩を、これまたいつものようにわたしがストーキングしていました。三百六十度どこを見渡してもおかしいことなど一点も見当たらない、いつも通りの休日の日常です。

「なんですか、輝くペットボトルって？」

ただ先輩の外出はなぜか追跡者を振り切ろうとするかのようにあちこち場所を移動するために、同行する方としては少々疲れます。先輩が自動販売機で飲み物を買って足を休めたのを合図に、わたし達は休憩をしていました。

「そうだね。例えばこれはただのペットボトルだろう？」

わたしの疑問符に先輩は自分が飲んでいたペットボトルを軽く持ち上げました。すでに飲み終わったようで、その中身は空になっています。

「はい、まあそうですね」

「飲み物が入っていないペットボトルには、普通何の価値もない。けれど十三歳未満の女の子が飲み終わったものは輝くペットボトルとなる。僕の目には、その差の見分けがつくんだよ。十三歳以上の人間が飲んだペットボトルはただのペットボトルでしかないが、五歳以上十三歳未満の女の子が飲んだペットボトルはまばゆいばかりの光を放っているんだ」

どうやら先輩に備わっている少女感知機能は、人間の域を越えつつあるようです。

さすがに啞然としていますと、先輩は飲み終わったペットボトルを自動販売機の脇においてあるゴミ箱に入れました。

「このゴミ箱にはないね。あればそれを収集して水筒代わり使うんだが……残念だ」

「では先輩。これを進呈します。輝いてますか？」

「いやいらないよ。ただのペットボトルなんて、ゴミでしかない」

わたしが自分の飲み終わったペットボトルを見せると、先輩は首を横にふりました。

なんとも素っ気ない反応です。思春期の男であるならば、女の子が口をつけたペットボトルを前にすれば「間接キス!？」と胸をどぎまぎさせるのが一般的な反応ではないのでしょうか。

わたしは「むう」と唸ります。

「先輩は五歳以上十三歳未満の女の子にしか興味がないようですが、そもそもそれは何故ですか？ 十歳を過ぎれば、わたしより発育のよい女の子はちらほらでてきます。幼いからといって純真であるということが幻想なのを承知してないわけでもないでしょう。五歳以上十三歳未満にあって、わたしにないものとはなんですか？」

「君が六歳でも十歳もなく、いま十六歳であることだよ。そんなことよりもいい加減、付きまとうのはやめてくれ。さすがに僕も疲れるよ」

そう言って先輩は再び歩き始めました。

先輩の言葉はとても納得のできるものではありません。そもそも理由になっていません。いつもならば先輩の言葉など無視してとことんつきまとうわたしですが、その時はその場で数秒思索しました。

「……………」

わたしの視線の先には、先輩がペットボトルを捨てたゴミ箱がありました。

その5 けんけん

キーンコーンカーンコーンと、この学校の誰よりも時間に忠実なチャイムが鳴ります。いつもなら昼休みの始まりを知らせる鐘にとたん学校中が騒がしくなりますが、入学式があつた今日は午前で終わりのため大半の生徒は帰宅していますから、静かなものです。

「いただきます」

「いただきます」

わたしと梓ちゃんは声を合わせて食事を始めました。学食で、わたしはAランチを。梓ちゃんは、カツ丼を。

……女の子が、かつ丼って、梓ちゃん。

「梓ちゃん、それゲン担ぎですか？」

箸で示してみると、梓ちゃんは何のためらいもなく頷きました。

「そうよ」

「またよくわからないことを……」

「負けられないのよ。変態ごときに、負けるわけにはいかないのよ」

そうして他愛もない会話をしながらむしゃむしゃ食していますと

「そういえばゆみ。あんたもしかして、お金がないの？」

ふと梓ちゃんが心配そうに聞いてきました。いきなりなんでしょ

うか。会話の脈絡なくそう聞かれたので、わたしは首を傾げました。

「いえ？ 潤沢ではないですけど、困っているほどでもありません」
ようするにいつも通りです。

「でもあんた最近そのペットボトルに飲み物入れてくるようになったじゃない。飲み物を買うお金もなくなったんじゃないの？」

梓ちゃんが机に置いたペットボトルを指差して言います。

「ああ」

その指摘で合点がいました。確かに数日前から、同好会活動中でもわたしはこの使用済みのペットボトルを使っていました。

「どうしたの？ なんかあったなら、相談してよ」

梓ちゃんの目はちよつと不安そうで、わたしが窮状にいるんじゃないかと心の底から気遣ってくれていました。

どうやらいらぬ心配をかけてしまったようです。これは早く誤解を解かねばと箸を止めてペットボトルを持ち上げました。

「これは輝くペットボトルです」
「輝くペットボトル？」

怪訝な様子の梓ちゃんにわたしは力強く頷きました。

「はい。これは梓ちゃんのお兄さんである先輩が口を付けて飲んだペットボ——」

「飛んでけ彼方に！」

「ああ、なにを！」

みなまで言わず梓ちゃんがわたしの手からペットボトルをもぎ取ってベキメシヤと音を立てて握りつぶし窓の外に力一杯放り投げました。野球部もびっくりの遠投であり、握力です。

わたしはあわてて窓枠に手を付いて追いますが……残念なことに、最近わたしに備わった先輩感知機能を持っても、輝くペットボトルのきらめきがどこに飛ばされたのか分かりません。

わたしは涙目になって振り返りました。

「梓ちゃん、窓から物を投げたらいいけません！」

「何を常識ぶってんのよ！ アホなのあんたは！ 兄貴の使ってたペットボトルだ？ どこから手に入れたか知らないけど、おぞましいわよっ。さすがにドン引きよ！」

「え……だってちゃんと洗いましたよ？ 本当は洗わずに使いたかったんですけど、ゴミ箱から取り出したものですし衛生上良くないなということ。それに何日も洗わずにいると飲み口から雑菌が繁殖しますからね」

「ゴミ箱からっ……？」

梓ちゃんの顔がひきつりました。その目は思考回路からして理解できない異星人の文化風習を見る目でした。

「ほえ？」

なにかまずいことをしましたでしょうか。わたしは、ぱちくり瞬きをひとつ。

「だって、先輩もやっていることですよ？」

「あのバカ兄貴殺す！」

「え、ちょ、梓ちゃん！？」

わたしが制止をする間もありません。

気炎轟々、口から火を噴きかねない勢いで梓ちゃんは学食を飛び出しました。

その6 ばちばち

学食を飛び出た梓ちゃんを追いかけてましたが、体格差からも分かるように、わたしと梓ちゃんでは身体能力に差があります。おバカのふたりとすれ違ってすぐにその背中は見えなくなってしまいました。

それでも出来るショートカットの限りをつくし、肩で息をしながら同好会の部室に飛び込みましたが

「……」

「……」

時すでに遅し。

容姿端麗な藤堂兄妹ふたりが互いに険悪な空気を出していました。そっぽを向きあっているというのに、真正面から睨みあっているかのようにバチバチと火花を散らし合うという器用なことをしています。

ちなみに先輩の顔は平手ではたかれた後のような紅葉模様の赤い痕と拳骨で殴られたような青タンと猫にでもひっかかれたような五本線が引かれています。

あちゃあ、と顔を掌で覆いました。

普段の先輩は温厚です。というか、幼女に関すること以外ではまったく興味を示さず感情的にならずクールな人柄です。元から仲の悪いふたりではありますが、それは梓ちゃんが一方的に先輩を毛嫌いしているからです。見たところ、先輩は梓ちゃんに対して悪感情を抱いていません。常ならば梓ちゃんに嫌悪の感情をぶつけられても涼しい顔で受け流しています。

ですが、人には限度というものがあります。意味も分からずはた

かれ殴られひっかかれれば、そりゃ誰だって不機嫌になるでしょう。

「はあ」

わたしはため息をついて梓ちゃんの隣に腰掛けました。先輩の隣に座りたいのは山々ですが、ご機嫌斜めの先輩と梓ちゃんの神経をさらに逆なでも仕方ないでしょう。そこはわきまえます。

しかし、このままでは会議もできません。梓ちゃんの暴力を止められなかった責任もありますし、とりあえず仲裁のため、先輩ラブのスイッチをいったん切りました。

「……梓ちゃん」

「私は悪くないわよ」

そう吐き捨てた後、そっぽを向いて目も合わせません。意思疎通の拒絶を全身で訴えています。

「……もうっ」

これは手のつけようがありません。

梓ちゃんも自分がまったく悪くないと思っているわけではないでしょう。ただ先輩に対してだけは意地をつき通しています。兄を相手に謝るなんて、梓ちゃんからすれば沽券に関わることなのでしょう。

わたしはもうひとりのほうを見ました。

「……先輩」

「僕が何をしたというんだい？」

さすがの先輩もぶすつとしています。

これまたもつともです。もつともすぎて説得の余地がありません。ふむ、と考え込みます。どうしましょう。どうやってこの場を治めましょうか。

いっそのこと何もしないで終了という考えなくはないのですが、来月分のボランティアの予定を決めるまでにあまり時間がありません。この時期ですと新入生勧誘についても話し合わなければいけませんし、進めないことにはこの先困ったことになります。

わたしは心中で唸りながらもふたりを見比べました。

大人っぽく美麗な見た目が良く似ていて、並べば一目で兄妹とわかります。それとこれを言ったら梓ちゃんが本気でぶち切れるので口には決して出しませんが、この兄妹、性格も根っこは似通っているのです。

「……梓ちゃん。話し合いをしましょうよ。ほら、三人で」

無視されました。

「梓ちゃん。そう意地にならないでください」

無視されました。

「……梓ちゃん？」

無視されました。

「……………はあ」

いい加減面倒になりました。
ていうかそういう態度ならばわたしにだって考えがあります。

わたしは席を立て、先輩の隣まで移動しました。

「……ッ」

梓ちゃんの眉がぴくつと動きました。

無視しました。

「先輩。梓ちゃんなんてほっという話し合いしましょう」

「そうだね。今日は梓に話す意志もないみたいだし」

「はい。えへへー。先輩とふたりきりで話しあえるなんて嬉しいです。至上の喜びです」

「それはいいから早く話を進めよう」

わたしと先輩は仲良く会話をします。先輩ラブのスイッチは切ったつもりでしたが、それでも思わずほにゃらんと顔がゆるんでいます。

「……っッ」

梓ちゃんの眉がぴくぴくつと動きました。

無視しました。

「でも『ふたりきり』だったら話し合うまでもないですね」

ふたりきり、のところに重点的にアクセントを置きます。

「……ッ！」

梓ちゃんが猛烈な勢いで睨んできました。
無視しました。

「そうだね。一カ月分のボランティア枠は五個しかないからね」

「はい。ではわたしと先輩で持ち合った分で、来月分のボランティア活動はけて――」

「ちょっと待ちなさい！」

とうとう立ち上がって叫びました。頭がいいのに刺激に対する反応が単純なところは、梓ちゃんのかいいところですよ。

今度は無視しません。

わたしはにっこり笑って振り返りました。

「なんですか、梓ちゃん。文句があるならはっきり言ってください」「んなことは言われなくてもわかってるわよ！ ゆみのはいいけど、兄貴の持ってきたようないかがわしい活動は絶対認めないからね！」

びしっと先輩を指差して、雄々しく言い放ちます。

「いかがわしいとはなんだ。真つ当な児童福祉じゃないか」

「兄貴がいうと児童福祉がとたんいかがわしくなるのよ！」

「それは言いがかりだろう。少なくとも活動中僕が何か文句を言われたことはないぞ。むしろ感謝されたことしかない」

「だまりなさいよ変態ロリコン！」

「まあ、ふたりとも座ってくださいな」

また手が出たら、仲裁が面倒なことになります。わたしは間に入って主に梓ちゃんをなだめました。

「ほら。気が済むまで話しあいましょう」

「言われるまでもないわ！」

「言うことは特にないかな」

そうしてつつがなく会議が始まりました。

その7　じゆるじゆる

「ちつきしょう、兄貴め」

「まあまあ。そんなことするとスカートめくれますよ」

同好会の会議終了後の下校途中です。わたしは地面を蹴りあげる梓ちゃんをいさめました。

今日の論争の決着はつきませんでした。ボランティア活動は月に五と決めてあります。同好会員がそれぞれ三つずつボランティア活動を見つけてくるのが決まりです。

わたしが取ってきた来月分のボランティア活動は三つともさして議論をするまでもなく認可されました。

そして、残り梓の二つ。この二つが問題です。

梓ちゃんと先輩、藤堂兄妹が持ってきたボランティアですが、全て日にちが被っていたのです。というか、先輩が獲ってくる児童福祉のボランティアを決してやらせまいと、梓ちゃんがわざと日にちを被せているのです。毎度毎度見事に日にちを被せる梓ちゃんの執念たるや恐るべし、というほかありません。その心意気を見ていると、実は梓ちゃん、先輩のことが大好きなんじゃないかと勘違いしてしまいそうになるぐらい大したものなのです。

「今日も激論でしたね」

「クソ兄貴の奴、ヘリクツが異常に上手いのよね」

忌々しげに、もしくは悔しげに言います。

「まあ、梓ちゃんの弁舌も大したものだと思いますけど」

藤堂兄妹の口の達者さでしたら、どっちもどっちに思えます。梓ちゃんも先輩も、会議において退くということは一切しません。先輩の幼女と触れあいたいという欲求と、そんなことさせるかという梓ちゃんの思いがぶつかり合い、会議は激烈を極めるのです。

そして藤堂兄妹の壮絶な論議は終わりました。

「でも新入生勧誘活動は決まったので良かったです」

勧誘活動は、ビラ張り以外は一切やらないことに決定しました。楽でいいことです。

梓ちゃんは肩をすくめて

「いくら部室があるっていつでも、うちは同好会だもの。しかも三人。正式な部活動に比べてそもそもやれることも少ないし、別に人が欲しいわけでもないしね。はっきりいえば、新入生なんて入んなくてもいいのよ」

潰れても構わない、と暗に言っています。梓ちゃんが同好会に入ったそもそもの目的は先輩を見張るためですから、本心でしょう。そこらへん、あっさりしています。

実のところ、来年以降なら潰れても構わないというのは同好会員全員の共通意識でもあります。梓ちゃんは先述した通りですし、先輩も自分の欲望……もとい、幼女に対する無償のアガペーを満たすためにこの同好会を作ったので、自分が卒業した後は気にも留めないでしょう。

「そうですね」

わたしも同好会の存続に興味がないところは同じです。愛着がまったくないとはいいませんが、先輩がいなくなったら、本気で何の

魅力ありません。面倒だという気持ちの比重のほうが大きいのが本心です。

「わたしも先輩が卒業した後、同好会をやっているかどうか疑問ですしね。新入部員なんていないほうが、いつそ後腐れなくつぶせて楽かもしれませんね」

ただ後輩が入ったら、さすがにそうそう止めるわけにもいきません。ボランティアが好きという奇特な人間がいなくても限りませんし、わたしも梓ちゃんも、そこで放り投げられるほど無責任ではないのです。

「……そういえばゆみって、そもそも兄貴のどこが好きなの？」
「え？」

同好会の未来について話そうとしたのですが、梓ちゃんはわたしの意図しなかったところに反応しました。

「話してませんでしたっけ？」

「うん。聞いてないわ」

「そういえば、そうでしたっけ」

そういえばそれは梓ちゃんにも打ち明けていなかったことでした。先輩を好きな理由。それはなんていうか、わたしからしてみれば考えるまでもないことだったからです。

でも梓ちゃんは「ロリコンは死滅しろ。消え失せろ。人類のゴミだ。火曜日には燃えろ」と口癖のように呟き先輩を毛嫌いしています。わたしのその愛が理解できないのも道理。そういう疑問が出てくるのも当然でしょう。

「だって先輩はカッコいいですし頭もいいですよ。体育の授業を見た限り、運動神経だって大したものでした。体育館でのバスケのミニゲームで、先輩は活躍していましたよ」

「あんた、去年の三学期から授業の時になぜかいなくなることがあったけど、まさか兄貴の授業をのぞきに……？」

授業など、先輩の汗を流す姿を見る価値に比べればささいなものです。

「見た目良し、成績良し、運動神経良し。パーフェクトではありませんか」

「ロリコンじゃなければね」

それが全て、というように梓ちゃんが憂い気に瞼を落とします。そういった小さな仕草も大人っぽくて様になっています。

「あんた、あの変態兄貴が身内にいる私の気持ちわかる？」

「代わってください」

即座にわたしは切り返します。

先輩と一緒にの家。なんという理想郷でしょうか。いえ、天国？

はたまた桃源郷？ それともそこはヴァルハラ？ もう！ ロマンチックが止まらないではありませんか！

「……口元」

「おっと」

梓ちゃんの指摘に、わたしはあふれ出たよだれをじゅるりとぬぐいました。

「しかし一緒の家……うふふへへ、やりたい放題ですね。梓ちゃん、さっそく戸籍変更の手続きを。養子縁組を活用すれば、住む家を何とか変えられるはずですよ」

「……そう。じゃあこう考えてみなさい」

ひどく疲れた様子の梓ちゃんが、言葉を変えます。

「あなたの父親は、重度のロリコンです。世間にはばかることなく、ロリコングッズを買いあさっています。食事の時には、幼女の話しかしません」

「そんな人、父親じゃありません。いえ人間ですらありません。そうだ異星人に違いありません」

わたしはきつぱりと断じます。

梓ちゃんがほっと息をつきました。

「よかった。常識はまだ残っていたのね。それと同じなのよ」

「先輩はいいですよ。先輩のロリコンは他のロリコンとはロリコンの一線画するロリコンでありロリコンを超えたロリコンなロリコンなのでそのロリコンはロリコンであってもロリコンとして許されるロリコンなのです」

「もうこいつはだめなのかしら……」

どうしたのでしょうか。空が降ってくるかとも杞憂しているかのように、梓ちゃんは世界に絶望した面持ちで茫然と空を仰ぎました。

「……あなた、昔はもつと普通の子だったわよね？ ていうか普通に普通の子だったわよね？ ねえ、いつの間にこんな子になったのよ。昔は誰かと付き合っている、そこまで盲目猛進じゃなか

ったじゃない。いつ常識を、節度を、社会のやさしいルールを忘れたの？」

「それは先輩の素晴らしさがわたしを作り替えたと言うほかないですね。恋に恋していたわたしはもういません。先輩に出会って初めて恋をし愛するということを知ったのです。常識？ 先輩に対する無限大の愛は、そんな梓に収まりきりません。節度？ 愛を叶えるのに、世間体なんて気にすることがどうして必要なんです。社会のやさしいルール？ そんなものを守っていたら、わたしはいつまでたっても先輩に夜這いをかけることができないではないですか！」

「一生するな」

梓ちゃんは頭痛を堪えるようにこめかみに手を当てています。

「今日久しぶりにあんたをうちに泊める予定だったけど……急速に不安になってきたわ」

「えええっ、約束は守ってくださいよ！」

「ああもうっ。守るけどさあっ。守るけどあんたも法律をきちんと守りなさいよ!？」

「え……も、もちろんですよ！」

「目を泳がすなあ！」

なぜだか知りませんが、梓ちゃんは涙目です。わたしの親友を泣かせるなんて、許せませんね。

「くっそう、最近は一偏頭痛がするようになったわよこのバカゆみっ」「大変ですね。心身は互いに影響し合いますから気を付けてくださいね。あと好きなところと言えば、先輩のあまり人を差別しないところとか」

なぜ罵倒されているかいまいち理解できませんでしたが、わたし

は話を続けます。

「……あんたの目は節穴？ あれは何よりも最低な基準で女を差別しているクズ人種のひとつよ」

「またまた。妹である梓ちゃんが、先輩の素晴らしさをわかっていないわけないでしょうに。梓ちゃんのアンチ先輩は筋金入りですね。何ですか。実はブラコンだったりしますか。ツンデレの愛情の裏返し表現ですか」

わたしのからかいに烈火のごとく怒りだすかと思えば、梓ちゃんの反応は意外なものでした。

「……そうね」

こめかみを押さえていた手をすっと下ろし、沈痛な面持ちでうつむいていた顔をあげました。

「昔は結構ブラコンだったわ」

「はいいいっ!？」

なんと首肯したのです。

意外、というよりいっそ衝撃的な告白です。わたしは思わず目を丸くしました。

「え、え!？ どういうことですかっ？ 梓ちゃん、実はライバルだったのですか!？」

狼狽するわたしに対し、過去を幻視するためでしょうか、梓ちゃんがふっと遠い目になります。

「いい兄だったのよ。昔はよく遊びに付き合ってくれて、勉強も教えてくれて、病気になれば母親よりも親身に看病してくれて、どんなわがまま言っても笑顔で答えてくれて、それでも私がいけないことをしたらきちんとたしなめてくれたわ。あんたのいう通り見た目だっという運動神経も人並み以上。それで頭もいいっていうんだから友達からだって羨ましがられた。あれが私の兄なんだって、誇らしくすらあったわよ。胸に飛び込んで懷かずにはおられない、鼻高々と自慢せずにはおられない、そんな理想の兄と言ってよかったの。昔はそりゃ優しくかったのよ。昔は……そう」

そこで梓ちゃんはわたしとぴたりと視線を合わせました。

「私が十三歳になるまではね」

全然意外な告白ではありませんでした。

「あ、なるほどー」

それ以上の言葉はいりません。かわいさ余って憎さ百倍。坊主憎けりや袈裟まで憎し。そんなことわざが思い出されました。

「身内にまでそんなのだから、諦めたほうがいいわよ」

投げやりに梓ちゃんが忠告します。

その言葉には、これ以上にないほど納得できました。

梓ちゃん先輩嫌いだただ単純な問題ではないようです。一言では語れない過去があり、その因果がいまにつながっているのです。う。

しかしそれで諦めるかといえ、そんなことはありません。わたしはしばらく無言でしたが、ふと語り始めました。

「わたしが先輩と初めて会ったのはですね、ふらっとひとりで道を歩いていた時です」

「……へえ」

わたしが真剣に告白しようとしているのを悟ったのでしょうか。梓ちゃんはこくりと頷きました。

「わたしはその時、とある事情でちょっと気分が落ち込んでいました。傷心であてもなく道を歩いていました。その道すがら泣いている女の子を見かけたのです。ぶっちゃけわたしは子供が嫌いなのでただ通りすぎようと思いました。でもその女の子に先輩がそっと近づき優しい笑顔で頭を撫で慰めてあげたのです。そんな優しさの溢れる先輩の行為にわたしは……」

「勘違いしないでよ！ その笑みの擬音は『ぐへへへ』とかそんなところよ！」

梓ちゃんがナイスツンデレでもっともな主張をします。

なるほど確かに彼女の言う通りではあるのでしょうか。あの優しい微笑みは仮面であり、それをひっぺはがしたならば表れるのは『ぐへへへ』でしょう。

しかし

「まあ、それはそれで構わないです」

「構えアホ！ 何よ。何よ何よ！ まさかそれで惚れたのっ？ バツカじゃないの！ 大バカよ！ 下手したらあの二人よりバカよ！？」

「いえ、おバカの二人よりっていうのはさすがに……それに大事なのはその後です。それですね、わたしは先輩を――」

「うるさいっ、もう聞きたくない！」

これからがよいところだというのに、梓ちゃんはそう叫んで耳をふさいでしまいました。

その8 しんしん

昔のことを話しましょう。

ある日、わたしの好きだった人は言いました。

「あんな小学生みたいなのと、付き合えるかよ」

放課後の教室に忘れ物を取りに行った際、偶然にもそこでわたしの片恋の相手が友人数名と恋愛談議に花を咲かせているのが聞こえ、つい気になって聞き耳を立ててしまったのです。

そうしていたら、盗み聞きの天罰でしょうか。その言葉がわたしの片恋の口から出てきました。

「……………」

教室の扉越しでそれを聞いていたわたしは、ふいとそこを離れました。

忘れ物を取ることもなく、わたしは家に帰りました。学校から家に着くのは無意識にできて、どうやって帰ったのかさっぱり思い出せないほどです。そのまま部屋にこもろうとして、でもじっとしてただけでは泣いてしまいそうでした。

わたしは私服に着替えて外に出ました。

行くあてもなく、ぶらりと道を歩きます。冬の空気は冷たく、吐く息は白くなり、時折吹く風は冷たく、優しくない冷気がしんしんと肌を刺すなか、歩きます。人通りもない路地道は静謐ですらあって、澄み切った湖の底にいるかのようでした。

ただ、歩きます。途中、友達の梓ちゃんやおバカのふたりところに行こうかとも思いましたが、きっと話しているうちに泣いてしま

うでしょう。愚痴をぶちまけても、涙は見せたくありません。それは、わたしのささやかなプライドと信念が、決して許さないことだからです。

だから、ひとりで考えます。

さむいほどにひとりぼっちで。片恋相手の彼のことを。好きだった彼の言葉を。

彼に悪気はなかったのでしょうか。もしかしたら、からかわれての照れ隠しだったかもしれません。わたし達は結構仲良しでしたから、それをネタにからかわれることは大いにありそうです。

でも、ショックでした。

もともと惚れっぽい性格のわたしです。告白してフラれたことも付き合っている相手と別れたこともあります。その度にわたしは経験を積んで、タフになったつもりです。

ただそれでもあの言葉はわたしの恋心をざっくり傷つけるぐらいの威力がありました。心をさまして、彼をいっぺんに嫌いにさせるほど聞きたくない言葉でした。

そうしてただ歩いていた時でした。

ふと、泣き声が聞こえました。振り返ると、ランドセルを背負った小学校の低学年とおぼしき少女がそこにいます。

いつの間にそいたのかは知りません。ほとんど周りを見ずにいたので、気がつかなくて当たり前です。何故泣いているのか見当もつきません。ただ転んだだけかもしれません。迷子なのかも知れません。もしかしたら深刻な事情があるのかもしれない。

ただ。

わたしは微かにいらっしました。自分の容姿にコンプレックスのあるわたしはその合わせ鏡のような存在である子供が嫌い、また今の気分はどん底にあるのです。そこにかん高い子供共の泣き声がつきさったら、どうなるかなんて言うまでもないでしょう。

泣けば解決するなんていう自立精神のない思考は、大嫌いです。わたしはそのまま角を曲がってわんわんと喚く子供を見過ごそうと

しました。

けれど、女の子に近づく人を見つけてわたしは思わず足を止めました。

その人に見覚えがあったのです。

それはロリコンと名高い学校の先輩でした。確か梓ちゃんの兄でもあった人です。梓ちゃんは「兄貴？ 私の家にそんなロリコンは存在しないわ」と断言し、彼を徹底的に毛嫌いしていてわたしに会わせようとはしなかったので直接の面識はありませんでしたが、二度三度遠目で見たことはあったので顔くらいは知っていました。

何となく陰からのぞき見をしてしまいます。笑顔で女の子の頭を撫でていたその人は、しばらくして女の子が泣きやむと笑顔で手を振り見送りました。ロリコンという噂を知らなければ、親切なお兄さんが女の子を慰めているほほえましい場面に見えたでしょう。ただ、彼の本性を知っているわたしには『ぐへへへ』という下心が透いて見えました。

くだらない。

心の底からそう思いました。

踵を返そうとして、しかし一部始終を見ていたわたしはふと閃きました。

それは悪意のある思いつきでした。少し自虐的な行動でもありました。普段なら思いつくことすらなかったでしょうし、行動に移すようなことは万が一にもしなかったでしょう。

でも、いまは。

「……」

わたしは曲がり角から出て、ロリコンだというその人に近づいていきます。歩いている途中に不安げな表情を作り、目前にいるその人に対して少し舌ったらずになるように意識して話かけました。

「あの、お兄さん。道にまよっちゃったの」

上目づかいでその人を見上げ、瞳を涙で潤ませることすらやってのけました。

からかってやれ、と思ったのです。ロリコンの男に小学生のフリをして近付いて勘違いさせようと思ったのです。本当に自己満足で、理屈すらついていません。それでも、そんな手段を使っても、しよせん男なんてそんなものなんだと溜飲を下げたかったのです。けれども、わたしの思惑はあっさり外されました。

「道に迷った？ 君は高校生だろう？」

その人の指摘に、えっ、と面食らいました。

「よそから来たのかい。まあそれにしてもその年で迷子とは……とりあえず案内するか。駅はこっちだよ」

そういつてその人は歩き始めました。呆然としていたわたしはあわててその人を追いかけます。

「な、なんでわたしが高校生だって分かったんですか？」

「君はどう見ても十六歳じゃないか」

ぴたりと年齢を言い当てられました。

「……」

この人の目はどうなっているのでしょうか。騙そうとした罪悪感と気まずさから、何も言えなくなっていました。

わたしはうつむきながら横を歩きます。その人の方から話しかけ

てくることもありません。

しばらく、無言でそうしていました。

「どう見てもと言いますけど」

言葉を漏らしたのは、そんなおもっくるしい沈黙に耐えきれなかったから、というわけではありません。

ただ、もっと別のもの耐えきれなかったからなのでしょう。

「わたし、よく中学生に間違えられます」

むしろ高校生に見られたことがあります。ぽつりとこぼした呟きに、その人は非常にどうでもよさそうに頷きました。

「へえ」

「小学生みたいだって言われるのもしばしばです」

「そうか。僕には妹と同じ歳にしか見えないけどね。世の中には目が節穴の人も多いから、君を十三歳未満に含めてしまう人間も多いのだろう。まったく、愚かなことだ」

「はい？」

突然の演説に、目を丸くしてしまいました。

どうしたことでしょうか。この人、小学生という単語を出したとたんぺらぺらと口数が増しましたのです。

「大体ね、世の中の多くの人間は間違っているよ。人間を判断する基準は見た目じゃない。美人だからなんだというんだい？ 歳をとれば、みな変わらない。だからと言って中身で判断するのもまた違う。性格なんて、いくらでも歪んでしまうものじゃないか。清く正しい人間なんて、ただの世間知らずだ。ならば人間の絶対変わらない

いものとはなんだい。絶対的な基準となるものはなんだ。人と人との関係の中にあって、それに流されないものとはなんだい？ そう。生きてきた年数、つまりは年齢だ。人間は、女を判断するのは年齢なんだよ」

意味不明な論法を使い、堂々と最低なことを言いきっています。

「……は」

ロリコンと言うのは噂にたがわないようです。さりげなく相談してみようか、愚痴をぶつけてやろうかと思っていたのですが、そんな気も失せました。

ただその代わり

「は、あはっ」

お腹の底から、笑いが湧きあがってきました。

「あははっ、あはははは！」

道端で立ち止まり、お腹を抱えて笑ってしまいました。先導していた彼もいぶかしげな顔で振り向きます。

「どうしたんだい？」

「いえもうおかしくって！」

笑い過ぎてちょっと涙が出てきました。目元をこすってそれを拭きとります。

ああ。

ほんとうに、変な人です。

人の価値とは何か。そんなことを語られるとは思いませんでした。

人の関係の中で絶対に変わらないもの。そんなもの、おそらくは血縁関係ぐらいなものでしょう。時がたつごとに知り合いも友達も、そして当然恋人だって常に絶え間ない変化に襲われてしまいます。そしてわたしは、そんな悲しくも楽しい変化にこそ価値があると思っています。

ただ、それでも、見た目なんていうわかりやすいものにとらわれず、内面などという流動的なものにも目をくれず、それでも人と人との間に変わらないものを見つけようとするそのロマンチックな思考が、なんだかもうどうしようもないくらい

「ほんとうに、面白くって」

笑ってしまいました。

「そうかい」

「ええ」

外面を重視して、内面で判断するような、根っからのリアリストのわたしには、ちょっと眩しい思考です。

わたしは最後にくすりと笑って、カミングアウトをすることになりました。

「梓ちゃんはわたしなんかよりもっと大人っぽいですよ。スタイルもいいですし、お化粧も上手です。服選びのセンスも素敵ですね」

何より自分を磨くことに手を抜かない彼女を、わたしは尊敬しています。

「……ん？ 妹を知っているのかい？」

「梓ちゃんとは中学からの友達ですから」

「じゃあ同じ高校？」

「はい。あなたの後輩になります」

「へえ」

やっぱり興味なさげに頷くその人、いえ、先輩にわたしは立ち止まりました。

「ありがとうございました」

頭を下げます。お礼と、何より謝罪の意を込めて、深々と。

「ここまでくればもう道は分かります」

「じゃあ気をつけて」

「はい、先輩」

手を振ると、先輩はあっさり立ち去って行きました。高校生にもなった地元の間が、ここらで道に迷うというありえない矛盾に気がついていないわけでもないでしょうに、そこをついてくることもありませんでした。

本気でわたしのことに一欠片も興味がないのでしょうか。先ほどの女の子に見せたような笑顔は欠片もありません。

それでも。

わたしはそっと自分の胸に手を当てました。

ああ、こりないな。

とくんとくん脈打つその鼓動に、我ながら苦笑しました。

その9 わくわく

『恋とはサメのようだ。常に前進しないと死んでしまう』

映画「アニーホール」での台詞です。お泊まりした昨日、梓ちゃんと一緒にDVDで見たその映画の台詞に、わたしは心を打たれました。

なんとという名言でしょうか。これは歴史に残るに違いありません。そんなことを思うほどに共感したのです。

わたしの好きな人はロリコンです。

その性癖は重度なもので、わたしのことなど見向きもしてくれません。

他人は止めておきなよとわたしを制します。

親友に至っては、殴りかかってきかねない勢いでわたしを止めようとしています。

それでも止まらないのは、わたしがこの恋を死なせたくはないからです。

人の気持ちは定まらず、ふと足を止めれば目移りしてしまうものです。恋なんてたったの一言で冷めてしまうことがあります。事実、一度止まって死んでしまった恋をわたしは知っています。

ただ、たったの一言で胸があったかくなれる恋があることもまた知っています。

だからDVDを見たその日に梓ちゃんの家で一泊し、学校に向かう最中わたしは宣言しました。

「いうことで梓ちゃん、わたしの恋はサメのようにノンストップで前進を続けます！」

「……サメ？」

「はい！ ……って、うわあっ」

横と一緒に歩いている梓ちゃんを見てわたしはぎょっとしました。

「……別にサメに喩えなくてもいいと思うのよね。回遊魚なら、イワシとかマグロとかでもいいじゃない……。サメだとなんか、止めるのに命がけになりそうで不吉だわ……。マグロでも大変なのに、サメだと止めようがないじゃない……。あいつら集団になるとクジラとか襲うのよ……」

どうしたことでしょう。梓ちゃんはひどく元気がないようです。顔色も悪く、足を引きずるようにして歩を進める彼女は全体的に負のオーラを背負っています。いつもはきりっとしている目にいたっては彼岸をさまよっているかのように虚ろです。

「あ、梓ちゃん？」

「うふふふ……ねえ神様……私、間違ってるかしら……？ 人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られてっていうけどさ……私のしてることは、そんなバチ当たりなことなのかしら……？ 友達が変態に、犯罪者にならないため必死に止めようっていうのは、そんなに悪いことなのかしら……？」

どうやら昨日のお泊まり会での夜更かしがちよつと堪えているようです。梓ちゃんの目には一体ナニが映っているのやら。もはやわたしの呼び掛けも聞こえていない様子でぶつぶつと呟き続けます。

これはいささかアブナイ状態です。どう見ても病んでいます。

実は昨日のお泊まり、梓ちゃんは徹夜をしたのです。明日の授業に備えて早く寝たほうがいいとわたしは忠告したのですが、梓ちゃんは何故か頑ななまでに寝ませんでした。しかたなくわたしは途中で説得とその他の目的をあきらめて睡眠をとったので楽ですが、どうやら完全徹夜を果たしたらしい梓ちゃんには朝日が随分と眩しい

ことでしよう。今日の授業は居眠り必至です。

まったく梓ちゃんたら、わたしの助言を無視するからこうなるのです。これはちよっとお説教が必要でしょう。

「梓ちゃんたら完徹なんて美容と健康に悪いことをするからそう――」

「友達なのよ……兄貴が入ってる最中の風呂場に突入しようとしたり、隙あらば夜中に布団を抜け出して兄貴の部屋の錠前にピッキングを挑んで忍び込もうとしたり、朝は『おはようのチューで目覚ましを!』とかトチ狂ったとしか思えないことをいって兄貴に突進しようとする奴だけど、わたしの親友なのよ……中学からの大親友なのよ……だから体を張って止めたわ……はがいじめにして、ベッドに叩きこんで、徹夜で見張って、なんとか心変わりするように諭して……でも……あははは……もう疲れちゃったかも……偏頭痛と胃痛に加えて徹夜で暴走サメっこの押さえつけだもの……ふふ……つかれ、たわ……」

「……………」

さすがのわたしも、悪いことしたなと思わなくもありません。

冷や汗がたらっと流れました。先輩への愛と梓ちゃんへの友情は、一応別物なのです。

これはいけません。ちらりと腕時計を確かめてみますと、七時四十四分。始業まで時間の余裕はありますが、肉体的にも精神的にも疲労困憊している梓ちゃんが道半ばで倒れないかどうか心配です。

そうしていると、後ろから背中を叩かれました。

「おはよ、佐々木ゆみ！ 今日もいい朝だな！ それにしても、なんだこれは？ 腐ってるのか？ もしかして巨神兵か？ どうしたんだ？ 早すぎたのか？」

「お前はバカだなー。梓に決まっているだろー。そんなこともわか

らんとはお前こそ腐ってるだろー。目と頭がー。でも、ゆみー。どうしたこのゾンビはー」

白黒コンビのおバカなふたりでした。

なんてことでしょう。梓ちゃんが心配な今この時に、こんな二人では何の役にも立ちません。

「おふたりともおはようございます。梓ちゃん、ちょっと完徹をしちゃったのでこんな様になってってます」

「目が腐ってるだとう！ しかもバカのくせに人のことバカとかいうなよ！ あ、悪いゆみ、後で事情はゆっくり聞く！」

「なにおー。バカにバカと言われるなんて心外すぎるぞー。抗議してやるー。あ、ごめんなー、ゆみー。後で聞くよー」

聞かれたので説明したのですが、おバカのふたりはギヤースカ言い合いを始めていました。ちなみに腐っているのはふたりの縁だと思われます。

「このバカちんめー。学食で、昨日の続きをしてやろうかー」

「やっぱりバカだろ！ お前なんて怖くもなんともないよ！」

「なにをー」

「事実だ！」

変わらずに仲の良いことです。公道の真ん中で恥ずかしげもなく堂々と口喧嘩でやりあっています。

「……えっと、一緒に登校しますか？」

半ば答えを予想しつつも一応聞きますと

「ああ、佐々木ゆみ！ こいつと決着つけなきゃいけないから先に行って！」

「ゆみー。このバカにとどめを刺さなきゃいけないから先に行ってくれー」

遠慮なく先に行くことにしました。

仲良く決闘まがいなことを始めたおバカナふたりは置いていきます。梓ちゃんもよろよろとついてきました。

あのふたり、遅刻したりしませんでしょうか。遅刻して、拳骨のひとつでももらえばいいんですが。

梓ちゃんは先ほどの会話にはちっとも反応しませんでした。いつもは鋭く冷えたツツコミが入るというのに、それが無いとは相当疲れがひどいようです。

「うーん」

少しでも梓ちゃんの疲労を誤魔化す材料はないかと辺りを見渡します。おバカふたりでは反応すらしなかったので、もっと刺激が強いものが必要でしょう。

そうして探していますと

「あ、先輩です」

斜め前方に先輩を発見しました。先輩はランドセルをしょって通学する小学生女兒を観察するため、通学は随分とおおまわりのルートを選ぶのです。なのでわたし達より早く家を出ていたのですが、偶然合流できたようです。

梓ちゃんがぴくりと肩を震わせ反応しました。

「兄貴が……？」

「はい、まだこちらに気がついていないようですけど」

ようやくまともな反応を返してくれた梓ちゃんにこっくりと頷きます。

しかし先輩がいるとなると、梓ちゃんへの罪悪感にばかり囚われるわけにもいきません。わたしの恋はノンストップと宣言したばかりなのです。

ばかりとスイッチが切り替わりました。さてそれでは行きましょう。さっそくサメのように先輩のハートに食らいつこう。そう走らだそうとしましたが

「ねえ、ゆみ」

それを梓ちゃんが止めました。さっきまでの生気のない声と違って、力のこもった声音でわたしの足を止めました。

「ひとつ、そういえば言っていなかったけど、私があんたを止めるのは何もあいつが変態だからというだけじゃないわ」

わたしは無言で振り返って梓ちゃんと向きあいました。梓ちゃんの目は真剣で、まっすぐで、逃げることもなんか許されない力がありました。

「梓ちゃん？」

「ゆみ」

梓ちゃんは、言います。

「あいつは、真正のロリコンよ。ガチで幼女にしか興味がないわ」

はつきりと、いつものような嫌悪からの言葉ではないようです。もっと真摯に訴えかける言葉でした。

わたしは頷きました。

「知ってます」

いまさら、そんなことは。

「あんたの恋は、叶わないわよ」

「それも、知ってます」

あの日、先輩に恋をしてからずっと。

「辛い思いをするだけよ」

「百も承知」

とうに覚悟はできています。

「あんた……」

「梓ちゃん」

どこか呆然とした様子の梓ちゃんに、わたしはにっこり笑いしました。

「それでもわたしは先輩が好きなんです」

ずっとずっと、自分の体が嫌いでした。小学生の頃からちつとも成長しない体が、大嫌いでした。年相応でない見かけが、我慢なりませんでした。梓ちゃんやほかの友人達の成長していくさまが、妬ましくてなりませんでした。小学生みたい、とからかわれるのが嫌

で、その言葉は恋心をいっぺんに冷やしきるほどに耳にしたくないものでした。

けれども先輩は見抜いてくれました。

先輩がわたしのことを子供扱いすることは決してありません。それは先輩の愛する幼女を侮辱することになるからです。先輩にとって、わたしは間違いなく高校生の女の子なのです。

幼女とそれ以外を見分けるために極限まで磨かれた年齢識別の眼力。先輩を好きになったきっかけは、極められた真正なまでのロリコンさです。そして、この恋の障害も先輩の真正なまでのロリコンさに他なりません。

皮肉なことには違いありません。

でも、それでも。

「梓ちゃん、わたしは絶対止まりません」

満面の笑みで、言い切ります。

「そう」

それに梓ちゃんは、ため息を一つ。

そして、いつものきりっとした目でわたしをまっすぐに射抜きました。

「それでも、わたしは止めてみせるわよ」

梓ちゃんの敵対宣言。

わたしは親友からのそれに不敵な笑みを返して、一歩、前へ。

「やってみればいいんですよ。ほらっ」

「あ、ちょっ、まてっ」

止めようとする梓ちゃんの手をすり抜けて、二歩目、三歩目。わたしは走り出しました。

恋をするのに、真っ直ぐすすむ必要はありません。海の中を泳ぐサメのように、自由に、したたかに、身をくねらせながら、叶わずともいいから、この恋が死んでしまわないように。

わたしは走ります。

「こらーっ、待てっっってんでしょう！」

「いーやーでーすーよ！」

追いかける親友を軽やかに振りきって。

途中、駆け寄るわたしに気がついて嫌そうな顔で振り返った先輩に満面の笑顔を送って。

わたしは、大好きな人に向かって泳ぐように走りました。

その9 わくわく(後書き)

なんとなく最終話っぽいですが、一区切り目です。まだ続きます。

その10 ときどき

頼みごとというのは、誠意が大切です。

わたしの経験から、人に頼みごとをするには信頼が一番大事なものです。しかしながら信頼とは常日頃から積み重ねるもの。もし初対面の相手や、それに準じる人間相手に頼むとしたのならば、重要になってくるのが誠意というものです。

ですが、誠意というものは見せるのが難しいものです。なにせそれは無形のもの。そして親しくもない人が調子のいいことを言っていれば、嘘をついているかもしれないと疑ってしまうのが人間というものです。

そこで、土下座というものが登場します。

ある意味、究極の誠意の見せ方であるその土下座を自発的にしたくなる、ということがあるでしょうか。強要されたわけでもなく、自らの意思である屈辱的なポーズをとりたくなったことがあるでしょうか？

ない、という人。それはそれでけっこうなことです。自身のプライドを守りきっているのでしょう。

けれども、人には土下座をするべき時というものが必ずあります。取り返しのつかないミスをしてしまった時、絶対押し通さなければならぬものがある時。そんな場面に直面すると、自然とその人は足を折り畳み、額を地にこすりつけるでしょう。

そう。

「先輩」

いまのわたしのようです。

「お願いしますっ」

というわけで、わたしは土下座をしていました。先輩の教室で、先輩の席のまん前で、イスに座る先輩の斜め下で土下座をぶちかましなから何をしているかといえ

「結婚してください！」

求婚をしていました。

土下座というものを人生で初めてやってみました。が、屈辱感というものは特にはありませんでした。そんなことよりむしろ、視界の隅にちらっと見えた先輩の上履きにココロを囚われました。なめてみたらどんな味がするでしょうか。そんな思考が頭をかすめたのは、お墓に持っていく乙女の秘密です。

こんな公衆の面前で行われた土下座告白が衝撃的だったのでしょう。今日の授業を終えて三々五々に散ろうとしていた周囲の上級生の方々が、わたしの行動にざわり、と反応します。

先輩はそんな中ですらも顔色ひとつ変えません。

「嫌だよ」

淡々とすげなく断わられてしまいました。

こんな異常事態においても心を揺らさないとは、先輩の鋼の精神には感服してしまいます。

しかしそんなことは予想の範疇です。先輩の精神が堅固な鋼ならば、わたしのハートはきらめく金剛石。その程度で引き下がるわたしではありません。

「なら、婚約でも構いません」
「断る」

「彼氏彼女の関係ではどうでしょうか」

「不可能だね」

「でしたら、お友達から始まる第一歩でも」

「進展は不可だよ」

「……そうですか」

つれない先輩に、わたしは面を上げました。グレードの高い要求から、徐々に下げていくという詐欺の常套手段を使ってみたのですが、先輩は一ミリも揺らぎませんでした。はっきりと自分の中で譲歩の線引きが出来ている人でないと、こうはいきません。さすが先輩です。

「わかりました。じゃあこれが最大限の譲歩です！ 先輩！ 一度でいいのでわたしとセッ——」

「それ以上は公衆の面前で言うなあああああ！」

わたしのセリフを遮える大声と共に、がらっと教室の扉を開けて人が入ってきました。

言うまでもなく、梓ちゃんです。

「やっと来たか、梓」

やれやれという感じの先輩の台詞に、デジャブを覚えます。少し前に同じようなやり取りをしませんでしたっけ。

「なんですか、梓ちゃん」

もう。いいところだというのに、邪魔をしないで欲しいものです。

「うるさい」

わたしの不満を一言で断ち切って、梓ちゃんはずんずん近づいてきました。

「授業終わって同好会に一緒に行こうと思ったのに、姿が見えないからいどこに行ってるのかと探してみれば……あんな何を言おうとした？　なにを言おうとした？　ナニを言おうとした！？」

なんで三回も同じこと聞くんでしょうか。

「別に、ただわたしと接吻してくださいと言おうとしただけですよ。かわいいお願いではありませんか」

「それはそれで問題だけど、ウソよね？」

「なんで決めつけるんですか」

まあ、嘘ですが。

とはいえ正直に認める必要もないので素知らぬ顔で、さらりと言
い返します。

「嘘だっというんでしたら、わたしが何を言おうとしたのか、言ってみてくださいよ。ほら、はい、どーぞ」

「あ、う……くっ。こ、こんな人前でセッ、セッ……ああもうっ。ともかく、卑猥な単語を言おうとしないの！　女の子でしょう！？」

顔を真っ赤にして口ごもる純情さは確かにかわいいのですが……まったく。梓ちゃんの乙女っぷりにはたまに呆れてしまいますね。ここは少し、女としての身の振りがたを教授しないといけないでしょう。

「いいですか、梓ちゃん。別に恥ずかしい事でもなんでもありません

んよ。というか、そもそも恥ずかしいことじゃないんです。こういうのは時には女のほうからねだることも必要なんですよ。いつまでも受け身だと、どうしたってマンネリ気味になることがありますからね。それに世の中の男女関係には、肉欲から始まるものも多々あります。わたしは先輩を籠絡する手段にそれを使おうとしただけであれ梓ちゃんなんですか首元を掴んだってわたし猫じゃないので皮伸びたりしないので掴めないうすよというかいえだからつかめなっていたたたたちちと梓ちゃん握力いくつですか!？」

「あはは、先輩がたすいません。うちのサメっ子が暴走しちゃって春になって浮かれてちよつと頭パーになっているだけなので、この子の言動は微塵も気にしないでください。欠片も記憶にとどめないでください。一切合財を消去してください兄貴の存在と共に」

さりげなく先輩をディスる梓ちゃんに、表現のとおり首根っこをつかまれずると引っ張られて行きました。

その11　どろどろ

先輩の教室での一悶着を終えた放課後。土曜日なので早く学校が終わり、太陽がまだ高いその陽気の中、わたしは電車に揺られながら無言で腕を真っ直ぐ伸ばして低いほうの吊革につかまっていた。なかばぶら下がりになりかけてしまっているのは、身長的にいたしかたないことです。

ちなみに、一緒に電車に乗っている隣の梓ちゃんは普通に吊革につかまっています。百十度ぐらいの程よい角度で、いかにも自然に捕まっています、という感じです。

なんて羨ましいことでしょう。

「……」

「……なに？」

「……いえ」

じいーつと見つめていると、梓ちゃんが気味悪そうにしてきました。いけません。視線が恨みがましくなってしまったでしょうか。

わたしは不審そうに聞いてきた梓ちゃんからちよいと視線をそらして

「ただ単に、服を透かしてブラ見えないかなと思ひまして」
「なっ」

適当にごまかすと、梓ちゃんは瞬間的に顔を沸騰させて脇を押さえました。

「あああ、あんたなにバカ言ってるのよ！」

「気にしないでください、梓ちゃん」

淡々と感情を込めずに言います。別にブラぐらい見えたっていいと思うんですけどね。あれは隠すためにあるんですから。

「梓ちゃんはそうやって、周りの男に幸せを振りまいてくれればいいんです」

「私は不幸になるわよ！？ ていうか、もしかして見えてた！？」

「大丈夫ですよ。見えてないです見えてないです」

「説得力がないわよ！？」

とにかくにも、どうやら誤魔化せたようです。しかし電車は嫌ですね。身長差がはっきりと出てしまう場所ですから。

ただ、わたしのテンションが低いのは、それが理由ではありません。

「ちょっとゆみ。機嫌が悪いのはわかってるけど、あんた、いつもならもうちょっと自制するわよね？」

自分の身だしなみを確認して、本当に見えていなかったと確信したのでしよう。いつもの調子を取り戻した梓ちゃんが尋ねてきました。

わたしは、そっと顔を傾けます。

「実は……アノ日なんです」

「公共の場でこれ以上に下ネタを続けるようなら、私にも考えがあるわよ……？」

「すいませんでした。大変反省しています」

いまのは自分でもどうかと思っていたので、素直に頭を下げました。

「でもですね、梓ちゃん。機嫌が悪い時のわたしって、いつもこんなものですよ？」

「うわ、こいつ自覚してるわ……」

そうです。はっきりと自覚しているぐらいいまのわたしは機嫌が悪いんです。嫌そうに顔をしかめた梓ちゃんに反応する気すら起きません。

「あーあ。それにしても、世界、ほろびませんかね」

陰鬱な気分丸出しでいます。

いつもなら、同好会の日は八割がたテンションマックスになるのですが、本日は残念ながら、会議ではありません。ボランティアの日です。今日は、先輩が梓ちゃんとの論争の結果に勝ちとった、児童福祉の日なのです。

先輩と一緒にいられるのはまあいいとして、問題は児童福祉というボランティアの内容です。

「滅びないわよ。ていうか、いい加減にしなさいよ。さっきのぶ、ブラが見えた、とかいう言いがかりといい、不機嫌を私に押し付けないでくれない？」

「べつに、別にですよおう？」

がたんごとんと電車で揺られながら梓ちゃんと会話をします。

今日は土曜日なので、昼前にはもう授業は終わっています。あの土下座を終えてから直接、同好会員三人でボランティアを行う施設まで向かっているのです。

ちなみに梓ちゃんの希望により、先輩とは二車両ほど離れていきます。先輩にこんなどろどろした状態を晒すわけにもいけないので、わたしとしても好都合です。

今日のボランティアは、児童福祉です。そう。わたしがあの低俗生物ゴキブリよりも嫌うくそガキどもの相手を――少々口が過ぎた気がします。まあ要するに、親しくもない生意気ざかりの児童の相手をしないといけないのです。

苦痛、の一言です。

「ゆみ、あんたは……」

そんなわたしの内心を察してか、梓ちゃんは呆れ気味の口調です。

「本気で、子供が嫌いなのね」

「子供なんて、幼児なんて滅びればいいんですよ」

「それ、人類も滅ぶって……って、ああ、成程」

梓ちゃんも、先ほどの言葉の真意を察してくれたようです。そうです。世界なんて、人類なんて滅びればいいんです。

「子供なんて、いなくなればいいのに……ふふふ、ハーメルさんでも復活して子供をさらってくれればいいのに」

「不謹慎な発言ね……あんた、誘拐事件起こしたりしないわよね？」

「失礼な」

一割ぐらいは本気で言ってそうな梓ちゃんに、一応フォローを入れます。

「いくら子供が嫌いでも、誘拐なんて面倒なことはしませんよ」

むしろ子供が嫌いだからこそ、そんなことはしません。誘拐するということは、その後に連れてきたガキの面度を見なければいけないのです。

「そもそもわたしは、卑怯なことは基本的に嫌いなんです。真正面からぶつかって、当たって砕けて再チャレンジです。……まあ、それでもダメだったらわかりませんが」

「それはよかったわ。でも、そんなに児童福祉のボランティアが嫌なら、兄貴を論破するのを手伝ってくれてもいいじゃない」

「好きな人の味方をしたいのは、人情じゃないですか」

「黙りなさい」

「もしくは恋情じゃないですか」

「黙れつつたでしょアホ」

たまに梓ちゃんは理不尽になります。

「それに誘拐事件の心配するなら、どう考えても犯人は兄貴のほうか」

「あはは、そんなまさか」

「まさか？」

「……………なんででしょうね」

どうしましょう。否定の言葉を続けることが出来ませんでした。

それでも口はまわるほうですが、とっさに否定できません。先輩が女子児童を甘言でかどわしている情景がまざまざと思い浮かんでしまいました。

いやまあ、梓ちゃんがしっかり監視してるのでそんなわけないとはわかっていますが、ね？ 何というか、やっぱりそういうのって、ね？

「まあ、ほんとにそんなことしたら、兄貴は抹殺されることになるけど。私に」

「梓ちゃんが見張ってる限り、先輩はしないでしょね、そういうことは。あとの候補は……嫉妬に狂ったブラコン梓ちゃんが、子供狩りを始めるとかですかね？」

「兄貴のことになると私の沸点は低いわよお、ゆみ？」

軽い冗談だったのですが、ごっこ、と効果音が突きそうなほど迫力あふれる笑顔で梓ちゃんが迫ってきます。 仁王もかくやという存在感にわたしはたじりと後ずさり

「ジョークジョーク、冗談ですから、ここは電車内ですから、ね？ 落ちつきましょう」

「ったく。ゆみは自分の都合のいい時だけ常識ぶるんだから……それにしても、ボランティアが嫌なら行くのやめる？」

「いきますよう」

元の流れに戻った話題に、唇をとがらせながらもそういいいます。ぶつくさ文句を言っていたため説得力はないかもしれませんが、覚悟はとっくに決まっているのです。

「先輩の為なら火の中水の中ベッドの中、どこにでも飛びこむつもりですもん」

「いや、ベッドはない」

やたらきっぱりと梓ちゃんが否定します。

「じゃあ、百歩譲って腕の中でも」

「はいはいここは電車の中だから、公共の場所だから、黙って静かにしなさいねー」

電車できゃあきゃあ騒ぐのは女子高生の習性だといいますのに、むぎゅつと顔にカバンを押し付けられ、わたしは口をふさがれました。

その12　ぎゃあぎゃあ

『こんばんは。合法ロリでおなじみ、佐々木ゆみです!』

とか、そんな自己紹介したらこの人たちはどんな反応するだろう、などとくだらない上にやや自虐的なこと思いながら

「佐々木ゆみです。今日はよろしくお願いします」

完全で完璧なる営業スマイルで、わたしは職員の方々に無難な自己紹介をしました。ちなみにこの笑顔が剥がれたら、下にあるものはとてもとても人前に出せたものではなくなります。

予定通りボランティアの施設に到着したのです。そうやって職員の方から軽い注意事項などを聞いた後、児童の集まる場所に案内されました。基本的に、児童といえるのはボランティアのメンバーだけということはありません。職員の方がしっかり目を光らせてくれます。

「……大丈夫?」

そんな中、梓ちゃんがそっと問いかけてきました。まるでわたしがぶっちんして、子供を片端から略奪し始め黒魔術の生贄に捧げるんじゃないかと心配しているかのような表情です。

ちなみに先輩は早くも児童の中に入って遊んでいます。笑顔で楽しそうに児童地と触れあっているその絵面は、なんとも不安に胸がかき乱される光景です。どうしても警察を呼びたくなってしまふのは、致し方ないことでしょう。

「まあ、何とかあります。梓ちゃんは先輩を見張ってきてください。わたしの心の耐久力はレベルが高いので、くそガ——もとい、子供たちのやることで傷ついたりはしません」

わたしはにこにこ笑顔のまま頷きます。児童福祉のボランティアはもう何回かやっていることですしね。ストレスのかからない時間の過ごし方というのは学んでいます。

「いや、兄貴はそうだけど……誰もゆみの心の心配なんてしてないわよ」

「え？」

ですが、梓ちゃんの心配はそういうところに向けられていたわけではないようです。

「あんた、子供にあたりちらしたりしないですよ？」

なんてことを言ってくれるんでしょうか、この親友は。

「あの、梓ちゃん」

親友からのいわれない中傷に、思わず眉が下がり情けない顔をしてしまいました。

「わたし、そんなに信用がありませんか……？」

「最近のあんたはね、これっぽちも信用できないのよ」

寸分も迷わず断定してくれます。
はつきりと言い切ってくれるじゃないですか。なんですか。喧嘩

を売ってるんでしょうか、梓ちゃんは。

「大丈夫ですよ。わたしの自制心はそう簡単には崩れません！」

「だから最近のあんたを見ると、とてもそうは思えないのよ……」

言葉を重ねてもまだ信用してくれません。心外です。先輩に対しては、わざと外しているんですよ。

「まあ、いいから梓ちゃんは早く先輩を見張ってきてください」

「そこまでのいうなら信用するけど。ま、ほどほどに無理しなさいね、サメっ子」

素敵なお言葉を遺して梓ちゃんは子供のほうに向かって行きました。それを見送ってから、わたしは改めて子供の群を眺めます。

梓ちゃんが先輩から女子児童をひきはがしてくれるので、わたしとしても安心です。それに梓ちゃんは先輩に似て、というのは語弊がありますが、わたしと違ってもともと子供好きなのです。シヨタとかそういう属性はなしにして。

「はあ」

わたしは笑顔のまま憂鬱のため息をついて、とりあえず用意していた紙芝居をカバンから出しました。これなら、読むだけですみます。それに、各自自由に遊んでいい時にお話を聞こうという子は大概おとなしい子なので、楽なんですよ。

「おねーさん、自作の紙芝居しますよー。聞ーきたーい子ーはこっちにおーいで。いまここじゃないと聞けないスペシャルですよー」

来なくていいよーとか思いつつも呼び掛けると

「おねえさん？」 「ちがうよね」 「でもちよつとはおねーちゃん？」
「でもあのおねえちゃんちよつとちがぁう」 「あっちのキレーなお
ねーさんみたいじゃない」 「カッコいいーおにいーさんともちがぁー」

とか遠慮ないことを言いながらも四、五人寄ってきました。

黙れやガキどもーと喉まで出かかった言葉は笑顔で飲みこんでおきます。

何せわたしは大人ですからね。それにわたしがどんなちんくりんなかつこをしても、最低でも十歳には見えるはずです。ざっと見たところ平均六歳、最年長でも八歳のガキどもに同一視されるのは納得いきません。

「はいはい。静かにしてくださいねー」

集まったガキどもに呼び掛けましたが

「はいー」 「しすかにする」 「だまるだまる」 「しずかだよー」 「
おねーちゃんうるさいー」 「うるさいのおねーちゃんだけー」

うるせえガキどもです。

「お姉ちゃんは良いんですよ。いまから喋るんですから」

ううん、しかしガキどもの相手をしていると自分の自制と分別に
限界を感じますね。梓ちゃんの心配もあながち完全な杞憂というわけでもないのが、何とも悔しいです。

ま、ともかく、紙芝居の始まり始まりー。

その13 けんけん

「とあるくにつてどこー？」 「外国よりさらに遠いおとぎの国です」
「おーきゅうつてなにい？」 「お城のことですよ。ほら、この絵の」
「まじよつていいまじよ？」 「ただのおばかさんです。どちらかという
と、ドジで世界を滅ぼすような」 「あーかみしばいやつてゐるぞ
！」 「はいはい、途中からでもいいならそこに座つて、静かにして
くださいね。なんならおねむでもいいですよ？」 「せかいつて、ほ
ろぶのー？」 「そうです。滅びちゃうんです、世界つて。そう、た
とえば、子供が減っちゃったりするとほろぶんですよ、世界つて。
めでたいですねーああ、途中からきた君？ 騒ぎたいならあつち
の綺麗なお姉さんのスカートでもめくつてきてください。運動組は
あつちです」 「わかったよ、たいちよー！」 「めでたいつて？」 「
隊長……？ なぜ……？ あ、めでたいというのは、良いこととい
うことですよ」 「たいちよーつ、あのおねえさんズボンだよっ！
ぼうぎよりよくたけーよ！」 「ちっ。そういえば梓ちゃん、ボラン
ティア前に着替えていましたね。じゃあ、じゃれつく振りしておっ
ぱいにでも触れればいいです。君にはまだそれが許されますよ、隊員
！」 「さすがたいちよー！ ぱねーめいいいだ！」 「ねえねえ、こ
どもいなくなるてめでたいのー？」 「ええ、すつつつごい良いこと
です」 「でも、こどもいなくなると、おねえちゃんもいなくなつち
ゃうんじゃあ……？」 「自分の心配より、わたしですか……？ あ
のですね、お姉ちゃんは俗世間でロリータに分類されるあなたたち
のような子供ではなく、合法ロリという属性に含まれる人種なので、
子供がいなくなった世界でもいなくなったりしないんです。ロリー
タと合法ロリという、浅学な人間には同じに思えてしまう言葉に、
実は大きな隔たりがあるのは知っていますか？」 「え？ え？

」とか、全然大人しくならないガキどもに補足を入れながら紙芝居を続けていますと

「おいこらメッキはがれてるわよ」

がずっと頭を殴られました。

梓ちゃんです。子供に懷かれまわりつかれて、なんだかやや着衣が乱れています。

「い、痛いですよっ」

「なあーにを教えてるのかしら、ゆみい？」

わたしの正当なる抗弁むなく、梓ちゃんが迫力ある笑顔で脅してきました。反射的にびくっと肩がふるえます。

「これは少しお仕置が必要かしら？」

「ち、違うんです梓ちゃん。わたしは子供たちに将来役に立つ知識を植えこもうと思って……！」

「植え込もうとか言ってる時点でもないことなのは確定ね」

必死の弁明ですが、無視されました。

梓ちゃんはわたしから子供の集団に視線を移して、ぱんぱんと手を叩きます。

「はい。みんな休憩がてらに、このお姉ちゃんのお話聞こうねー？」

『はい』

お行儀のよい元気な返事が返ってきます。団結力が、こっちのメ

ンバーとは段違いでした。

「げっ」

梓ちゃん、ガキどもをこっちに押し付ける気まんまんです。わたしの嗜好を理解した、すごい効果的な嫌がらせです。

「『げっ』？」

「何でもないです……」

わたしのうめきをオウム返してきた梓ちゃんの笑顔に逆らえる気はしません。

しゅん、とうなだれて、紙芝居を再開することにしました。

「はあ……んじゃ、再開しますね」

その絵本 ろうろう（前書き）

ゆみの作った絵本の内容です。本編とほとんど関係はありません。ついでに人によってはものすごく読みにくくできています。読み飛ばしていただいても何ら支障はありません。

その絵本 ろうろう

「むかしむかしの話です。

とある国にはあるひとりのお姫さまがいました。

お姫さまは、自分がお姫さまだというのがあまり好きではありませんでした。

というより、自分がお姫さまだということになんの意味も感じられなかったのです。

お姫さまの上には、ふたりの姉姫さまがいて、ふたりの兄王子さまがいました。

お姫さまは末の子で、それゆえに王様からも王妃様からもかわれず見むきもされませんでした。

王宮の離れに住まいをあたえられ、側仕えの侍女もひとりがいるきりです。

それを恨んだことはありません。

姉姫さまがたや兄王子さまがたをうらやんだこともありません。

そもそもお姫さまは豪奢なくらしにも、ひとにかしずかれることにも興味はありませんでした。

ただ、自分がいなくとも王宮はなにかわらないのではないか？
そう思うと、やはりお姫さまには自分がお姫さまである意味など、
いっさいない気がするのです。

だからお姫さまは、自分がお姫さまだというのがあまり好きでは
ありませんでした。

そんなある日。

お姫さまは魔女と出会いました。

『一の姫ちゃんのへやはどこかな』

そう話しかけられたのは、お姫さまが勉強のあいま、ぶらりと庭
をさんぽしていたときでした。

話しかけてきたのは、くろいローブをきた妙齡の女性です。

『……だれですか、あなたは？』

国の姫をちゃんづけよばわりするにんげんを、お姫さまは初めて
みました。

『私？ 私は魔女だよ！』

『へえ』

自己紹介になっているようではありません。

魔女を自称するかのじよは、見かけのわりにはずいぶん子供っぽくかんじられます。

『それだけでは、だれだかわからないのですが』

『そうだね』

お姫さまがあらためて聞くと、魔女はおお、と手をなりました。

『なら東の森の魔女といえわかるのかな？』

そのことばに、お姫さまは目をみひらきました。

東の森の魔女。

そうよばれている魔女はこの国いちばんの、いえ、この大陸でいちばんにちがいない魔女です。

その魔女はさまざまな魔術をつくりあげた、えらい人なのです。

もう五百年も生きているというのです。

かの魔女に不可能はないと、つくれぬものはないとたたえられた魔女なのです。

お姫さまは、魔術のたぐいのものに興味がありましたから、その

名称はよくしっていました。

『うそをつかないでください』

『ええっ、うそじゃないよ!』

『あなたみたいにはかっぱい人がそんなえらい人のわけがありません』

『なんと!　ばかっぱい!?!』

『身分詐称はけっこうなじゅうざいになりますよ?』

『だから本物だって!』

ひっしにべんめいする魔女に、お姫さまはなっとくはしないまでも疑いをとりさげました。

『まあ、あなたがかの魔女だとして。姉姫さまに、なんのようです?』

『いろいろと研究のきよかをとりにお城にきたんだけど、なんだか一の姫ちゃんにあってくれてたのまれちゃったの。』

魔術に興味があって、私の話を聞かせてほしいんだけど…
…』

魔女はそこで、えへへとごまかくようにわらいます。

『みちに、まよっちゃって』

『そのとで、まいごですか』

あきれたようにいうお姫さまですが、内心、すこしおもしろくありません。

けっこう前に、お姫さまも東の森の魔女にあわせてもらえないかと、父様にたのんだことがあるのです。

それをないがしろにされたことになります。

姉姫さまに非はないにしても、よこどりされたようで気分がよくありません。

『……父様は、この王宮は、やっぱりわたしに興味がないのですね』
うつむき、ちいさくちいさく呟いた声は、魔女の耳にかろうじてひっかかったていどです。

『ん？ なにかいった？』

『いえ、なんでもありません。それより』

ずっと顔をあげたお姫さまは、ひとつ決意をしていました。

『姉姫さまのへやに案内するにやぶさかではありません。』

ただ、ひとつ頼まれごとをきいてくれますか？』

だからお姫さまは魔女に頼んでみました。

『わたしを、お姫さまではなくしてください』

魔女のこたえは。

『別にいいよ?』

あっけらかんとした、是でした。

「数日後。

魔女は、お姫さまにとある種をわたしました。

魔女がつくった、とてもチカラのこもった種です。

『これはどういうものなのですか』

お姫様さまは魔女にたずねました。

魔女はこたえました。

『それを土に植えると、どんな条件だって芽をだして茎をのばして、きっかりちょうど一ヶ月で花をさかせるんだ。

そうして花を咲かせた瞬間、その種を植えた人間のことを、みんな

な忘れてしまっただよ』

みんな、とお姫様がおどろくと、魔女はそうだよ、と頷きました。

『大陸中のみんな。』

誰ひとりとして例外なく』

ただしね、とさとすように魔女はつづけました。

『その代わりこの種を植えた人のことを、ここから大切に思っている人間は、花が咲いたって忘れてくれない。』

それどころか、絶対に忘れられなくなるんだ。

その記憶がうすまることすらない。

お姫さまとつてみればとっても都合の悪いことにね。

それでもいいならこれはあげるけど、どうする？』

魔女のその問いに、お姫さまはすこしもまよったりはしませんでした。

『べつに、構いません』

悲壮感などかけらもみせず、お姫さまは当然のようにいいました。

『わたしを大切に思う人なんて、この大陸には一人もいませんから』

お姫さまのこたえに、魔女はちよつとさみしそうな顔をしました。

魔女からもらった種は、なんの問題もなくすくすくとそだっていききました。

いったいこの草はなにを養分に行っているのでしょうか。

庭のかたすみにてきとうにうえただけで、みずやりもしていませんでしたが、それでもその草は茎をのばして葉を広げていきました。

庭師にはこれはけっして抜かぬよう厳命をしておきました。

『姫様、これはいったいなんの草ですか』

不思議そうに、聞いてきます。

『長年この職をやっておりますが、こんな奇妙な草は見たことがないですよ』

庭師の疑問に、お姫さまは魔女から聞いたこの草の名前でこたえました。

『魔女からもらったの。』

忘れるな草、というらしいよ』

そうやって種をうえてから、あしたでちょうど一ヶ月になる日。

お姫さまのへやに、魔女がたずねてきました。

『あしたで花が咲くね』

ほほえんでいう魔女に、お姫さまはそっけなくうなづくだけでした。

『はてさて、あしたが経ってなんにんお姫さまのことをおぼえてられるかな。』

お姫さまはどうおもう？』

お姫さまのようすなどきにもとめずに続ける魔女に、お姫さまはかんしんのなさそうにこたえました。

『ひとりだっておぼえているはずがありません』

お姫さまのその返事に、魔女はたのしげなわらいごえをもらしました。

『ふふ、それはどうかな』

『……なんなのですか？』

魔女のようすをさすがに不審におもったお姫さまですが、魔女はそれにこたえず窓のそとに視線を向けました。

『ねえ、あの草、なにを養分にしてそだってるとおもう？』

『さあ？』

はなしを逸らされたのはきにくわいですが、ちょっと興味があったことなのでお姫さまはそのしつもんにつかることにしました。

『へへー、やっぱりわからないか』

得意げにじらす魔女に、お姫さまはちょっとむっとしました。

『さっさとつづけてください』

お姫さまがつよくうながすと、魔女はあっさりと種をあかしはじめました。

『あれはね、ひとの記憶を栄養にしているの。』

ねっこが地面をとおして、あの草を植えた人にかんする記憶をすいあげているの。

そうしてたくわえられた記憶をはきだすために花を咲かせるんだ。

花が咲いた瞬間、記憶は人のものでなくなる。

記憶は、花となってかれおちる。

だから人は忘れてしまうの。

あの草を植えた人のことを』

へえ、とかんしんするお姫さまに魔女はやわらかくほほえんでつ

づけました。

『お姫さまの植えた草はずいぶんおおきくなったね』

庭のかたすみにある草をすつとゆびさしています。

『ふつうは、あんなにおおきくならないよ？』

せいぜい、あの十分の一ぐらい。

それだけお姫さまは人の記憶にあったということなんだ。

それは、すばらしいことじゃないのかな』

魔女のそのことばに、お姫さまの表情はいつさいうごきませんでした。

『そうですね』

むしろ淡々とお姫さまはことばをつむぎます。

『かりにもわたしは姫ですから、知っている人も多いでしょう。』

そして、わたしはそれだけの数の人間になんともおもわれていないことになりますね。

あの草は、植えた人のことを大切におもっている人間の記憶はすえないのでしょうか？

ふつうの十倍ですか。

そんなに草がおおきくなっているのがその証拠です』

魔女はお姫さまの顔をすこしかなしげな表情でみていましたが、あきらめたようにため息をつきました。

『そうだね。』

人が人を大切におもうところは、あんな草ぐらいじゃすえない。

むりにすおうとすれば、強固にしていこうして、むしろその人の記憶にていちゃくする。

その人が絶対に忘れないくらい、記憶がうすまることのないくらいつよくつよくね』

魔女のそのことばに、お姫さまはやっぱりなんの興味もしめしませんでした。

そうして、花が咲くその日。

お姫さまは、じつと窓からあの草をながめていました。

お姫さまはただただ無表情です。

その表情に、自分の記憶がみんなのあたまからきえさることについてのみれんやかなしみはいっさいうかがえません。

そのかわり。

花が咲くのをたのしみにしているような様子も、
いつさいありま
せんでした」

その絵本 ろうろう（後書き）

単語チヨイス、およびひらがな表現はものすごく適当にやっています。ごめんなさい。しかもこともあろうか、途中で終わっています。二つぐらいあとの話で、結末を付け足す予定となっています。

その14 たらたら

窓枠から流れていく風景は、夕日で茜色に染まっています。

ボランティアを滞りなく終了させた帰り道、電車に乗っているわたしは流れていく風景を目で追っていました。

「ゆみ……あんた、子供たちと盛り上がってるかと思えば、途中でもう紙芝居関係なくなってたじゃない。私が入んなきゃ、どんな脇道それてたか……」

「不思議ですね」

呆れ気味の梓ちゃんに、平然と答えます。くそガキどもと離れたので、精神力がだいぶ回復してきました。梓ちゃんの皮肉などへでもありません。

中途半端な時間だからか、この車両にはわたしと梓ちゃんしかいません。先輩は、何か用があるとかで駅までの途中で引き返して行きました。

人がいないので、わたしと梓ちゃんは遠慮なくきゃあきゃあと騒ぎます。

「というか、あれは幼児には向いてないと思うわよ？ 子供には難しい言葉多かったし、なんか紙芝居というより、設定からしてどっかのコバルトみたいだったじゃない。子供相手だったら、もっとふわふわした感じの内容のほうがいいと思うけど」

「うーん。まだどの年齢にどんな話が合うかわからないですよね」

あの紙芝居は一カ月かけて作り上げた大作だったのでですけど、から回ってしまいましたね。梓ちゃんの軍勢と合流したあの後もガキ

どもがぎゃあぎゃあ騒いでいたために、最後まで読み終わることはありませんでした。特に質問攻めにされていましたが、単語のチョイスとか難しすぎます。年齢が混合されている時は、何歳を基準にすればいいんでしょうか。だれか教えてくださいな。

「……ねえ、ゆみ。あの絵本の主人公って、あんた？」

そう問いかけてくる梓ちゃんは、やや聞きづらそうでした。

「……そうですよ」

なんでわかるのでしょうか。

「安心してください。ハッピーエンドなお話なので」

「べ、別に心配なんてしてないわよ……」

言いつつも、心配性の梓ちゃんはほっとしているようでした。

あの紙芝居の主人公は、自分も含めて、大切なものがない女の子。他人も自分も捨てて、生まれ変わりたい女の子。正確に言うならば、あれは、幼いころのわたしの願望です。

ですが

「ぶっちゃけると、そこまで自己投影したわけではありません。児童文学とか童話を参考に見てみたんですけど」

「あれが？　ていうか、パクリなの？」

「オマージュです。完全なオリジナルをかけるほど創作意欲にあふれているわけでもないの、『モモ』と『エルマーとりゅう』と『ハリーポッター』シリーズその他に童話諸々をごたませにしたんですよ」

「それ混ぜ合わせたら、何でもできそうだけど……ていうか、どう

でもいいけどなんで全部活劇系の話なのよ。……あ、活劇で思い出したけど。あんた、男の子けしかけてきたでしょう」

切れ長の目が、じろり、と睨みつけてきます。

「はて」

なんでばれたんでしょうか。ついと横に目を反らします。

最終的には転んだ振りでズボンを引きおろしてパンツを確認しろ指令を下したのですが、上手くいったんでしょうか。残念なことにあのあと報告がぱったり途切れてしまいました……。

とりあえず、しらばっくれます。

「なんのことですか？ エロガキ隊員のことなんて知りません」

「やっぱりあんたが隊長じゃない！」

はぐらかしたというのに、梓ちゃんは何故だか確信を深めてしまいました。

「違います。あのガキが勝手に隊長って呼んでいただけであって、わたしはそれに乗って色々とミッションを下してただけです」

「なにが『だけ』なのかしら。語るに落ちたわねえ。告白してるわよお……！」

ぽきぽきと指を鳴らしていましたが、やがてはあ、とため息をつきました。

「ま、子供のやることだし良いけどさあ……ゆみは子供嫌いな割には、やたら子供と打ち解けるわよね」

「そうですか？」

ぱちくりと瞬き。そんな自覚はありませんが、梓ちゃんの目だと

そう見えるのでしょうか。

「そうよ。ゆみは母性ないけど、責任感強いから、面倒見いいでしょう？ それに何より子供って勘が鋭いから、本性見抜いてるのよね……あ、電話」

やや聞き捨てならないことを言いかけていた梓ちゃんがふと呟いて携帯をとりだしました。着信音はなっていないから、しっかりマナーモードにしてあるようです。

着信を確認した梓ちゃんが、ふと眉をしかめました。

「あれ、登録してない番号からだ」

「梓ちゃん、母性がないってなんですか。わたしのこの先輩の全てを受け入れられる海のような大きな心では足りないというんですか。あれですか。母性って、海ではなく山ですか。そうですか心よりも胸ですか。母性って、しょせんは胸なんですか!？」

「ええい、うるさいわよせめて本性のほうツツコミなさいよっ。あ、もしもし」

電車内ですが、他に乗客はいないので良いと判断したのでしょう。周囲を確認した後、梓ちゃんが電話にでました。

「はい、藤堂です。あ、今日はありがとうございました。ええ、はい……え？ いえ、すいません。心当たりは……はい、それでは」

二言三言、言葉を交わし電話を切りました。梓ちゃんは心配そうな表情で、通話を終えても携帯を見つめていました。

「どうしたんですか？」

「いや、さっきの施設からだっただけで、子供が一人いなくなっ

たんだって」

いなくなった子の名前を聞いて、するりと顔が浮かびました。
紙芝居の時『子供がいなくなるのは良いこと』という説明にくだりのとき涙目で余計な心配でわたしを氣遣ってくれた、あの女の子の名前でした。

「あの子ですか……」

「なんか私達が帰ってからすぐいなくなっちゃたらしくて、ついてきてないかって聞かれたんだけど……」

梓ちゃんの視線に、ふるふると首を横に振ります。心当たりはありません。

「そうよね……」

梓ちゃんも難しい顔をして、あごに手をやります。

「このあたりじゃないにしても、都心の方じゃ行方不明事件もあるみたいだし、しんぱ、い……」

梓ちゃんが、お終いまでいわず語尾を途切れさせました。

「どうしました、あずさ、ちゃ……」

不自然なそれについて、何かとわたしも追及しようとして、途中でぴたりと口を閉じました。

しん、と沈黙が落ちました。

がたんごとな、と電車の車輪が沈黙を埋めます。わたしと梓ちゃんが同じことを考えているのは明白です。

「……………そういえば、兄貴は？」

「……………えっと、その、さあ？」

聞いた梓ちゃんも知らないふりしたわたしも、先輩の行動は把握してあります。

繰り返しになりますが、帰りの途中で先輩は用があるとかで途中で引き返していました。

ただ、それを言葉に出したら何かが終わるような、そんな予感があつたのです。

ざあっと梓ちゃんの顔から血の気が引きました。

「まさか、兄貴の奴、マジで…………？」

「あ、あの、梓ちゃん。大丈夫デスよ？ わたしは、タトエ友達の身内に犯罪者が出ても、気二しないというか、変わらず友達ですよ？ むしろ、身内になりたいというか、その…………」

さりげなく混ぜた先輩に対してのアプローチに、いつものようなツッコミは入りませんでした。

その代わり

「気を、つかわなくていいのよ…………」

地獄の底から這い上がって来たような、おどろおどろしい声が返ってきました。

「あ、梓ちゃん…………？」

「身内の不始末は、身内がつけるわ…………」

その無気味な声色に、ひく、と頬がひきつりました。

これは、この前の徹夜明けの時にもその片鱗をみせていた梓ちゃんの病みモードです。

「大丈夫……もしものこの家に帰ってきたら、私の目の前にその姿をさらしたのなら、すぐにでもゴーモンして全部聞きだすわ……それから、世間が納得するような、セイサンでザンコクで、目をそむけたくなるようなシヨケイをするから……あ、大丈夫よ。その後、私もちゃんと自首するわ……」

「か、覚悟は立派だと思いますが、リッパな行為とはいえませんがねっ」

先輩が殺されるのは、わたしも見逃すわけにもいきません。というか、そもそも先輩が犯人と決まったわけでもありません。さっきは先入観から思わずあんな風に言いましたが、そもそも先輩が犯人だと考える方が無理があるのです。

「え、ゴーモンするにしても道具がないって……？ あは、安心して。一般家庭にある大工道具や調理器具は、リッパなゴーモン器具になるのよ……金槌、のこぎり、包丁、ピーラー……あは、あはははは」

梓ちゃんが超怖いです。

「梓ちゃん、落ちついてください。わたしの考えですが、先輩は犯人ではありません」

そっか、梓ちゃんはツンデレというより、ツンヤミなんだ誰得ですかと思いつつも、梓ちゃんを落ちつかせるために言い聞かせます。

「え？」

あらぬ方向を向いてた梓ちゃんは、空ろな笑い声を止めてこっちを見てくれていました。

「それ、ほんと……？ 誘拐犯は、兄貴じゃないの……？ うちは、犯罪者の家族だって罵られなくてすむの……？」
「はい」

すがりつくような声に、断言します。ていうか、断言しないと藤堂兄妹が色々つまずい事態に陥ってしまいます。

「兄貴、ちっちゃな女の子集めてハーレム、とかやってないわよね……？」

梓ちゃんは想像力がかわいらしい感じにたくましいです。

「現実的に考えてください。高校生に、そんなことできるわけないじゃないですか」

涙目で可愛くなっている梓ちゃんに、笑って保証してあげます。実際問題、小さな子供を高校生が長い間監禁するなんて不可能です。その場所を用意する段階で、もう無理でしょう。

「だから先輩は、おそらく帰りの途中であの女の子がはぐれて迷子になったのに気がついたのでしょう。それで引き返して保護しているだけです」

あの女の子が何で施設を抜け出したのかまではわかりませんが、そんなところで間違いないはずです。

「で、でも、ゆみ……」

それでもまだ先輩誘拐犯疑惑を消し去ることが出来ないのか、梓ちゃんは弱気モードのまま聞いてきました。

「だったら、何ですぐ施設に帰してあげないの……？ ていうか、そもそもどうして女の子が迷子になったってわかるのよ……？」

「いやいや、先輩には幼女感知機能があるではないですか」

「え、なにそれ？」

初耳だったのでしようか。梓ちゃんは咄然とした様子で、ぽかんと口を開きました。

そんな梓ちゃんに、わたしは自分の胸をどんと叩いて保証します。

「でも大丈夫、安心してください。わたしも最近、先輩感知機能を取得しました。先輩の幼女感知機能ほど精度はありませんが、何となく先輩のいる方向距離は感じ取れます！ 子供を施設に帰さない理由はわかりませんが、次の駅で降りて先輩を追っかけ事情を聞きます。大船に乗ったつもりで待っていてください！」

「え、いや、だからそれなに？ さっきからさも当然のように語ってるけど、その感知機能？ とやらは、人類についてるオプシオンだっけ？ なに？ ない私が変なの？ 違うわよね？ あんたらが変態なだけよね？ んん？ 現実的な思考はどこにいったの？」

「なにを言ってるんですか梓ちゃん！ これは現実には備わっている愛の特典機能です！」

「ちよっと黙れバカ」

いつきに平常心を取り戻した梓ちゃんが、きっぱりと言い切りました。

「ば、バカって酷くないですか……？」

「あ、いや、ごめん。確かに親友に向かってひどい口きいちゃったわね、私。言葉のチョイスを間違えたわ。ゆみ。改めて懇切丁寧にあなたの改善点を色々と言いなおすから、ちゃんと正座して聞きなさい」

「え、あの……」

「なに？ 兄貴の前だったら嬉々として土下座もするのに、私の前だと正座も出来ないの？ なにそれ不公平よ。良いから言うこと聞きなさい」

さっきまでのおどおどした弱気モードはどこへやら、有無を言わせぬ口調ですが、あの梓ちゃん。それには論理的な整合性というものが見当たらないうえに

「ここ、電車なのですが……」

いくら貸し切り状態で人がいないとはいえ、こんな場所で正座はちょっとごめんです。同情をひくため、さっきの梓ちゃんのように涙目でうるっとした上目遣いを――

「せ・い・ざ」

「はい、隊長」

梓隊長の命令に、即座に従いました。人間、引き際の見極めが大事です。わたしは梓ちゃんの譲歩線を正確に見極め、ぎりぎり許されるだろうシートに正座しました。

梓ちゃんはちょっと不満そうでしたが、さすがに床を強要するほど暴虐ではありませんでした。きちんと靴を脱いでシートに正座をしたわたしに、ふんと鼻を鳴らすだけにとどめます。

しかし、ちょっとした問題があります。これは各駅ではなく特急

電車です。次の駅まで、あと十分ほどかかります。やわらかいシートに正座しているとはいえ、これは――

「さて、お説教よ、ゆみ。人としての常識を勉強しなおしましょう」

たらりと冷や汗を流すわたしの心の内を知ってか知らずか、短くも長いお説教が始まりました

その15 くんくん

「はっ」

目を覚ますと、わたしは駅に戻っていました。

「ええっと、ここは駅……？」

一瞬自分の立ち位置を見失っていましたが、間違いなく、ボランティアに行った施設の最寄り駅です。

しかし梓ちゃんの恐怖のお説教のせいでしょうか。ここにくるまでの前後の記憶が抜け落ちています。正座でお説教されていたせいで、ちよっと意識が異次元に突入していたようです。それでもちゃんとこの駅に降りてるあたり、さすがですわたし。

「あー、でもまだちよっとしびれていますね」

顔をしかめながら、太ももをさすります。

いや、酷かったんですよ、梓ちゃん。普通に正座させるだけならばまだしも、最終的には膝の上に乗っかってきたんです。正座をするわたしの膝に行儀よく座って、超至近距離で目をじっと見つめて説教してくるんですよ。十分やそこらとはいえ、ストレス負荷のあまり後半は意識が遠くに飛んでいったくらいだったです。

とはいえ、やることがあるのですからいつまでも突っ立っているわけにもいきません。

意識を集中させます。先輩の気配先輩の気配先輩の匂い先輩の気配、と愛を込めて念じながら、大体の場所の辺りをつけます。

「そんなに遠くないですね……」

先輩の気配が感じられるところは、児童福祉施設からそんなに離れた場所ではありませんでした。

こういう時、先輩の携帯に連絡を入れられないのが不便です。連絡しようにも、わたしは毎日山のようにメールを送った結果、番号を着信拒否にされてしまいました。梓ちゃんに至っては、そもそも先輩の番号を自分の携帯に登録すらしていません。「兄貴の情報が入るなんて、考えただけで汚れる気がする」と言っていたのを覚えています。

足は……うん、だいぶ回復しました。何とか動きます。

わたしは、先輩のいる場所に向かって歩きはじめました。

その16 とつつ

先輩は、公園にいました。

やっぱり女の子と一緒にでした。施設からは少し遠いところですし、職員の人々もここまではまだ探しにこれていなかったのでしょうか。

先輩は、公園のベンチで、うつらうつらしている女の子を、おぶっていました。

「……………」

アウト。完全にアウトです。先輩のことを知らないならともかく、うちの学校の人間が見たら即通報するレベルの光景です。職質されたらどうするつもりなのでしょう。

「あーでも先輩の歳なら兄妹に見えないこともないですか……」

「……君か」

ぶつぶつ呟いていますと、さすがに先輩がこちらに気がつききました。女の子をおぶったまま立ち上がり、こちらに近づいてきます。

「どうしてここに？ 梓はどうしたんだい？」

「施設の方から、その子がいないと電話があったので、もしかしたらと思って折り返してきたんです。梓ちゃんはことのしだいによつては殺人衝動を抑える自信がないと言って、先に帰りました。梓ちゃんのことですから、あとで心配になって戻ってくるかもしれないかもしれませんけど」

梓ちゃんは、ほんとに自分というものをよく承知しています。先輩も納得したように頷きました。

「なるほど」

「それよりその子、さっきの施設にいた子ですよ。先輩は何をやっているんですか？」

「この子をおぶってるんだよ」

見てわかることを、説明しないで欲しいです。

「もう一回、同じことを聞いた方がいいですか？」

少しトゲのある口調になったのは、許してもらいましょう。

「この子は、帰りたくないらしいんだよ」

「……」

なぜ、と聞こうとして、少しためらってしまいました。

そんな躊躇に気付いた様子もなく、先輩はとつとつと話します。

「今日が思いの他楽しかったらしくて、紙芝居の続きが知りたくて、こっそり施設を抜け出そうとしたらしいんだよ」

「……」

そんなに、楽しかったのでしょうか。あんな紙芝居、適当にやっていただけです。

「……その子、虐待でもされてるんですか？」

胸の中で、ごちゃごちゃした感情が雑多に入り混じります。いつもはちゃんと自制するのですが、それを整理しきれなかったせいで

しょう。普通には聞きにくい、真っ先に思いついた最悪の予想を言葉に出してしまいました。

「いいや」

先輩は首を振って否定しました。

「そこまで深刻ではないよ。ただ、上手く溶け込めてないようだけみたいだね」

「……そうですか」

その返答には、我ながら同情がこもっていませんでした。いわれのない迫害ならともかく、それを努力不足だと断じてしまいうわたしは、ひどい人間なのでしょうか。溶け込めない人間には、それだけの理由があるのです。

「先輩。その子、貸してください」

「持てるのかい？」

がんばれば、三秒ぐらいなら平気です。

もちろんそんなことは口に出さずに無言で両手を差し出すと、先輩が女の子を丁寧に渡してくれました。小さくとも、その重みはずっしりと腕にきます。

持ち続けられる気がなかったので、受け取ってからすぐに地面に立たせました。

「……あのね」

「世話を見ると甘やかすは、まったくの別物ですよ」

なにか言おうとした先輩の口を、言葉で押し込めます。まさか甘

やかしているつもりはない、などという言い訳は、はなから聞くつもりはありません。

「この子はわたしに任せて、先輩は先に帰ってください。男の人が連れていくと施設の人に変な誤解されかねませんし、先輩はずっと甘やかしそうです」

さすがにそんなことはないでしょうが、先輩がロリコンだという前提条件を置けば説得力のある理由ではあります。

それでも先輩はちよつと未練があるようで

「その子、どうするんだい？」

「施設の方が心配されているので、連れていきますよ」

当たり前のことを当たり前に言います。ただ引っ込み思案なだけの女の子を連れだす理由も引き留める根拠も、わたし達にはないのです。

「そうだね」

それがわかってるのか、先輩は案外大人しく踵を返しました。

「……………」

先輩が見えなくなってから、わたしは頭をふらふらさせている女の子の頬を、ぺちぺちと叩きます。

「ほら、起きてください」

「あ……………」

女の子が、ぼんやりと目を開けました。

「かみしばいの、おねいりゃん」

「おねいりゃんってなんですか」

もともと達者ではないろれつが、さらに回っていません。ほっぺたむにーってひっぱってやりましょうか。おもちゃみたいによく伸びることでしょね。

「おはようございます。歩けますか？ おねむなら、おしゃべりしなくてもいいですよ」

相手するのが面倒なので、という本音はもちろん隠します。

女の子はごしごしと眠そうに目をこすりながら

「まだあ、あそぶうの」

「もどらなきゃだめですよ。友達がたくさんいるのでさびしいことはないでしょう？」

「いないもん……」

「ああ……」

そういえば、馴染めてないんでしたっけ。いまのは失言でした。

「だから、かえらなくていいもん……」

「もん、じゃないですよ」

よくわからない理屈に、ため息をつきます。

子供だから、そんな我がままを言っているとは思いますが。けれども、聞き分けなければいけないこともあるんです。

それに、わたしはこの子の保護者でもないのに、そんな我がまま

をかみ砕いてあげる気はありません。

「だってえ、あそこ、さみしいの……」

「はいはい」

「みんな、はなしてくれないの……」

「そうですか」

「だから、きょう、たのしかったの……」

一瞬、ぴたりと呼吸が止まりました。

「そう、ですか」

どうも、この子の脱走の一因に、わたしがあるようです。

「……あのですね」

わたしは、女の子と手をつないで歩きはじめます。さすがに先輩みたいにおぶる気はないですが、手を引いてあげるぐらいは、年長者の役目でしょう。

女の子は、よたよたした足取りながらも付いてきました。

「保護者の位置にいる人は、そりゃ優しいですよ。目下を構ってあげるのが、目上の人間の役目で、仕事ですから。今日のわたし達だってそうです。そういう人たちは、与えるべき立場にいるんですから」

「ふえ……?」

「でも同じ位置にいる人と仲良くなるには、話しかけなきゃ、ダメなんですよ。怖くても、面倒でも、自分から笑顔で話しかけないとだめだと思って行動するべきなんです。そうすれば、相手は意外なぐらいきちんと付き合ってくれます。人は、自分が思ってるほど他

人のことを覚えませんが、他人が思っているほど自分を忘れることも、またないんです」

「……？」

「人と付き合うのは面倒です。人生を過ごすのは、大概が苦しいです。大人になんかならずに、いつでも守られた子供でいたいのです。それは、大人になるにつれて思いを増します。それでも、わたしは自立しようと思いました。いまも、人に寄りかかりたくないと思っています。人と人は、対等であるべきだと思うのです。だって、わたしは」

別に、女の子に教えているわけではありません。ほとんど理解できていないでしょう。実際にさっきから、女の子の首はななめに傾きっぱなしです。

ただ、胸の内を吐きだしたいだけなのです。

「ちいさいのが、嫌だったのです」

だから、元気よく話して、活発に動いて、明るく振る舞って、少しでも自分を大きくみせたかった、わたしは、そんな、コンプレックスを原動力にした、ちっぽけな女でしかないのです。

「わたしはわたしが好きではありません。自分のことが嫌いでした。自分の意味なんて知りませんでした。だから、わたしは………いえ」

こんなこと、子供相手にすることでは、なかったですね。梓ちゃんに反論できません。これでは、当たり前散らすのと変わりませんからね。

「……ごめんなさい。もう、静かにしててくださいね」

余計な事を、喋ってしまいますから。

「ふえ？」

とまどう女の子に、そっと笑いかけます。

「なんなら、紙芝居の続きを話してあげますから」

自分で作ったものですし、何度も練習していたおかげで、内容はほとんど暗記しています。少なくとも、そらんじるぐらいはできます。

「ほんとうっ」

顔を輝かす女の子に、すまし顔で「もちろんです」と頷きます。

「ただ、絵はなしになりますけどね」

その朗読 ひらひら

「その日の正午。

花が咲きました。

ちいさなちいさな白い花が、草のすべてをおおわんとするかのよう
に咲きほこりました。

人の記憶がつまっているとはおもえないほどちいさな、しかしそ
れにふさわしいようなはかない花でした。

お姫さまは、花が咲いたのを確認したあとすぐに自分のへやから
でていきました。

へやをでて、お城をぬけだし、じょうへきの門をくぐりました。

ちっぽけな女の子をきにとめる人など、ひとりもいません。

お姫さまはひょうしぬけするほどあっさりそとにでれました。

あまりにかんたんに、お姫さまはお姫さまでなくなりました。

ただのひとりの女の子になりました。

さて、これからどうしようか。

あまりに広大なそとのふうけいに、女の子は目をほそめました。

広すぎて、自由すぎて、なにをすればいいのか見当もつきません。とりあえずどこかへいこうと、何者かになろうと歩みをすすめようとした女の子に、声をかけるひとがいました。

『おや、こんなところにかわいい女の子がいる。』

まいごかな？』

そのじょうだんめかした口調が知っている声でした。

女の子がはじかれたように声のほうをむくと、そこにはあの魔女がたっていました。

『東の森の……』

『や、お姫さまでなくなった女の子』

わらいながら声をかけてきた魔女を、女の子は剣呑なめつきでにらみました。

『あなた、うそをつきましたか？』

『うん、なんのこと？』

なにをいつてるのかさっぱりわからないよというような魔女に、女の子は口調をいらだたせました。

『大陸中、誰ひとり例外なくわすれさせる、といったじゃないですか！』

『うんうん、いったねえ』

魔女はうなずきながら奇妙な、人がひとりはいれるぐらいの、宝箱みたいなさうしよくのなされたはこを地面におきました。

『……なんですかそのはこは？』

魔女の行動があまりにもきになったものですから、女の子はいったん追求をやめて質問をなげかけてしまいました。

『へっへー、君があけるまでのおたのしみ』

『わたしがあけるのですか？』

『そうだよー』

さあどうぞ、とうながす魔女に女の子はしばらくためりました
が、とうとう好奇心にまけてあけてみました。

すると、どうでしょう。

お城のほうから、いろいろのものがこのはこめがけてとびこんで
きました。

きらびやかなドレスやごうせいな家具のかずかず、ほうせきから
うすっぺらいかみきれまで。

それは女の子がお姫さまのときつかっていたものです。

びっくりする女の子をしりめに、はこはその容量をむししてどんなものをすいこんでいきます。

そうしてすうものを全部すいとったのでしょう。

ばたんとおとをたてて、ひとりでにふたがしまりました。

そして、ぼうつともえあがってまたたくまに灰になってしまいました。

『いまのは……』

『そのはこをあけた人に関するものを全部すいとするはこ。』

これで君がお姫さまだったっていうこんせきはなくなったね』

ぼうぜんとする女の子に、魔女はいたずらがせいこうした子供の
ような表情をしました。

『驚いた?』

ゆかいそうにいう魔女を、女の子は半眼でにらみました。

『そうですね、あとしまつをありがとうございます。』

それはともかく話をもどしますよ。

あなたは製作者だというからあのくさの影響をうけていないので

はないですか？』

『えへへ、それはちがうよ』

問いただす女の子に、魔女はちょっとはにかみながらこたえました。

『私は君のことを大切におもっているから、君のことをおぼえてるんだよ』

てらいのない魔女のことばに、女の子はあっけにとられ、ぽかんと口をひらいてしまいました。

『わたしのことを？』

『うん』

『たった二回しかあったことのない子供のことを？』

『うん』

『ぶあいそうで、人になつかない、どうにもあつかいにくそうなお姫さまのことを？』

『うん』

『……なんで、ですか』

『それはねえ』

女の子の問いに魔女は素敵にわらってこたえました。

『君があんまりにほうっておけない子だからだよ』

それに女の子はびっくり箱をあけたときいじょうにおどろいた顔をしましたが、しばらくして、すこしほえみしました。

『そうですか』

そうだよ、と魔女はしゅこうしてから女の子にききました。

『ねえ、君はこれからどうするの？』

『そうですね、あてはいっさいありません』

『ふふ、なら君はやっぱりまいごなんだね』

『そうかもしれません』

『ならさ、わたしの弟子になってみない？』

魔女は女の子にひとつ提案をしました。

その提案を女の子はじっくりそしゃくして考えてみました。

わるくないような気がしました。

『構いません。』

いえ、ぜひお願いします』

女の子がそういうと、魔女は顔をほころばせました。

『よし、それだったら君のなまえをおしえてくれるかな？

いつまでも君、だとも呼びにくいんだ』

魔女のといに、女の子はいっしゅんだけ黙考しました。

それから、ゆっくりと口を開いてこえます。

『わたしの名前は――』

その17 りんりん（前書き）

サブタイトルがどんどん適当になっていく……。

区切りのいいところまで投稿してしまおうと、1／5現在、四話投稿しました。最新話から来ている人はご注意ください。

その17 りんりん

女の子を送り届けると、施設の方からは何度もお礼を言われました。とりあえず、女の子が読みたがっていた不出来な、自己投影も甚だしい紙芝居だけ残して帰路につきます。

途中、経過の連絡を梓ちゃんに送りながら、思います。

さみしいの、とあの女の子は言いました。

けれども、淋しさなんて誰もが知っています。

たぶん、それを知った時に、わたしは無力な我がママを言うのをやめました。我がママを通すために、自ら行動しようと決めました。何より、強く生きようと思いました。構ってもらうのが当然だと思っていた幼少期から、ちよつと成長しようと思ったのです。

それでも時々、それを理解していても、生きていけば無性に淋しくなる時があります。膝をかかえていじけたくなる時があります。わたしはひねたところがあるので、そんな時に手を差し伸べてくれる人がいるなんて、おとぎ話だと思っていました。

けれども。

無関心に素っ気なく、それでもあの言葉は、心に響きました。女の子に生意気な事を言いましたが、結局、人は自分のことを助けてくれる人を好きになるのです。みんなに覚えてもらわなくてもいい。こちらがみんなを覚えることだって出来ない。そんな中で、肩書でもなく、見てくれでもなく、自分というものを見てくれた人についていきたくなるのです。

「……あれ？」

駅に着くと、意外なことに先輩がいました。

「どうしたんですか」

駆け寄るわたしに、先輩は嫌な顔をするでもなく淡々と答えます。

「君を待っていたんだよ」

「そうなんですか？」

意外な返答です。

それに、わたしのことを待っていたと言う割には、何故か駅の改札ばかり見ていました。どちらかというと、駅から誰かがくるのを期待していたような感じです。

どうしたのでしょうか。わたしを待っていたというのは何かの方便でしょうか……

「……あ」

ふと、あることに気がつきました。

「……ああ」

気付いたそれは、たちどころに確信になりました。

「どうかいしたかい？」

「……いえ」

気遣うような先輩の問いですが、それは形ばかりで気持ちちはちつともこもっていませんでした。

わたしは一瞬だけ目を細めてから、すぐにてらいのない笑みを浮かべました。

「何でもないです」

「じゃあ、行こうか」

「はい。……ところで先輩。先輩は、どうしてロリコンになったんですか」

わたしの質問に、振り向いた先輩がうつすらと笑いました。

「さあ？　気が付いたらそうになっていたよ」

そう答える先輩はさびしげで、切なそうで、ああ、嘘をついているなど簡単に見抜くことができました。

「そうですか」

だからそれ以上は追及しませんでした。何となくわかってしまったことを、言葉にするのは止めにしました。

ただ、先輩の斜め後ろを歩きながら。

もつと先輩のことが知りたいな、とより一層その思いを深くしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010z/>

ロリコン・コンプレックス！

2012年1月5日21時08分発行